山形短期大学民話研究センター資料叢書

続　牛方と山姥

海老名ちゃう昔話　第二集

編　武田　正

続　牛方と山姥

海老名ちゃう昔話　第二集

チリと李蔵　38
臼の化物　32
化物むかし　31
笛吹き聟　30
蟹の恩返し　22
蜂の恩返し　19
鼻高くなれポンポン　17
狐と狼　15
日本一の相撲　12
ライオンといるか　9
耳なし芳一　8
和尚と狐　5

孔子のはなし　40
桃太郎　43
中将姫の曼陀羅　47
強盗と領主　48
帰らずの山　49
播州赤穂の皿屋敷　51
鮎売り与吾兵衛　52
炭焼きじじい（狐むかし）　57
狸の太鼓打ち　60
足柄山の金太郎　63
狐むかし　65
蛙の坊さま　66

餅の標的（まと） 68
天人女房 70
夢判断 74
おのこの島 75
雀のヒョウタン 76
二人娘 79
馬の荷物 79
石猿 80
人魚 86
雷をつかまえた話 89
兄弟話 91
ネズミとカエル 92
仙人と若衆 93
三人兄弟 96
鬼の面 107
オタタカ鳥 108
根ぁない話（結句） 108
我慢くらべ 108
小僧と狐 109
仏さまが牛 111
あとがき 114

凡例

一、話者の語り口そのままを記したものである。
二、方言には特に・・・・を打ち区別した。
三、昔話の配列は語った順に集録した。
四、昔話の集録にはテープコーダーを用いた。
五、大体は第一集『牛方と山姥』の方法をとった。

チリと杢蔵

山ン中に、二人友達、この友達の名はチリと杢蔵と名付ったのな。その男は、

「山ン中に、おらだこがえ働いてばりいだって、ねっから分んね。こりや、どこさか広いどこさ行ったらええんねが」

と相談して、旅立って、ずうっと行ったところぁ、見たこともない町さ行って、おらだ奉公に入るところない。町はずれさ行って、茶屋さ腰かけて、まず団子なの食って、

「ここらに、おらだ奉公なのして、使ってもらうようなどこ、なかんべが」

と言うたところが、

「ありどもありども、このずっと向うさ行って、左さ入って行くじど、大きな家あるどころなんだれば、何人でも使って呉れる」

ということを、このおかみさんに聞いて、喜んで行ったところが、町はずれに道、やっぱし左手さ入って行くところさ行ったところが、大きな屋敷の、門なのある家さしずしずと入って行ったわけだ。そして、

「今日わ」

というたれば、「上がれ」と言わっで上る。台所で、

「おらだ方こうしたいと思ったげんど、奉公に使っておくやるどこ無いくていたところぁ、どっから聞いて来たどこだから、使ってもらいたい」

「あまりええ、ほんじゃ上がれ」

と言わって、まず上がって、飯など御馳走になって、

「屋敷掃除してもらいたいなぁ」

と。そして屋敷掃除、二人でして、

「ええどこもあるもんだなぁ、山ン中なんて居っじど、こんがえなどこ見られるもんでなかった。いや、出はって来てよかったなぁ」

なんて語っているうちに、娘が屋敷廻りに来た。いや、ええ娘、見たこともない娘、こがえにええ娘だもんだなんて、二人で魂消て、

「一服すっか、まず、娘見て」

なんて、二人で腰掛て一服して、チリは言うには、

「おらぁ、あの娘見て一生ここで掃除してだってええなぁ」

と言うたところが、杢蔵は、

「おらぁ、聟になっだい」

と言うたそうだ。

「聟になどなられるもんであんまえちゃえ」

なて、二人でいたところが、そのこと

を聞きつけらっで、
「チリと、李蔵来い」
「なあに、おらだあがえな話しては、ここさ置かんねから行げと言うであんまえが」
なて、まず恐るおそる行ったらば、
「なに話した」
と言うたらば、
「こういう話した」
と語んねでいらんねんだし、語ったそうだ。そうしたところが、
「んじゃ、お前、いつまでだってええから掃除してて、あまりええ」
と言わっだど。
「そうだな」
と考えて、何を書くもんだかと思ったところが、筆と硯の墨すってその娘は書いたそうだ。
手より高く咲く花に
何とて李蔵は　心かけたやら
と、こういう風に歌詠まっだ。そうすっど、考えっだけぁ、
手より高く咲く花も
散りれば李蔵の下になるらん
と、返し言葉やったど。そうすっじど、何とも仕様なくて、
「ほんじゃ、娘言ったものを、これくらいな返し言葉書くには、賀にする」

と、こういう風に言わって、そして今度聟に行く段となって、髪結ってもらって、紋付き着せてもらったら、とてもええ、品のええ、そこさ坐るような聟になったというごんだも。ほだから、望みざぁ大きく持たんなねど。

臼の化物

一人の男が、大食で、とても何処でも使うどこなかったど。一升飯なの普通に食って、そんでもまず、二人番前は仕事すっかったそうだな。

その者は山の方さでも行って、飯なのたんと食えっどこさ行かなくてなんねと思って、行ったところが、とてもええどさ行って、

「おれ、大食で何処も使うどこないほでに、飯さえも一杯食せてもらうじど、おれぁ稼がれっから食せてもらいたい」

と言うたら、

「よしよし、おれにゃ米などいっぱいあっから、たんと食って働いて呉ろ」

と言わって、喜んで、あるとき、水車小屋が山の方にあっかったそうだ。そして先には臼ばっかりで、ドンサェン・バンサェンと搗いっだげんど今度は足でタンテン・タンテンと搗く臼で、一俵ずつ

のを二俵も搗くごんだけど。
「これは飯など食ったたて、こがえに働く者だもの…」
と、鍋持たせて、喜んで食いたいだけ食れるものだとて、鍋もらって米搗きしったって。
ある晩、何だかガラーッと戸あけて来て、ニヤニヤ笑ったり、にらめっこする大入道来たったど。こっちでもにらめっこして、
「こがえな化物など、おれぁ敗けない。一打ちにしてくれんべ」
と思って、そいつさかかって行って、持って随分に重たいのだけ、そいつを持って、裏に岩あるのさ、ドェンとはたいたれば、パェンという音すっこんだど。
そして朝げになるばり待ちて行ってみたば、臼の化物だったど。先には臼は使わっでいたげんども、先ず世の中さ出さんねから、情なくて出来たなだど。

化物むかし

まず、ある村さ、折々ええどこさ入って来て、そこの旦那を連て行ったり、いろいろして、世の人々は何の話というと稼ぐ気もなくして、
「今晩あたり来んであんまえか、化物に

は何処にいてもねらわれんだから…」

　という話ばかりではぁ、稼ぐ気もないどこだったもな。そしてそういう話は自然と遠(とか)くまで響いたもんだから、武者修行はそういうところばかり選んで歩くもんだから、これは幸いと思って来て、地主どこさ来て話したら、

「それはええ、幸(しやわ)せなごんだ。誰言うとなく遠(とか)くまで響いたなんざぁ、幸せなもんだ」

　なんて、喜んで酒なの飲ませらっで、

「どこどこ辺りさ、今晩入るかと思っていたところだから…」

　と、先ずその家さ案内したら、喜んではぁ、

「みんな高枕で寝ろ、おれぁ一人で起きていっから、化物などおれぁなじょにも退治すっから」

　なんて言わっで、まずみんな寝て、その人は寝ぶた振りして、鼾かいていたところぁ、やっぱし煙出しからドェッーと入って来たものあったそうだ。そうして見っじど、まず本当の化物なんだしそいつと組打ちして、化物負けらかして、

「さぁ、みんな縄でも持って来い」

　というもんで、皆呼ばって縄でギィギィと手足縛ってズルズルと引張って行って、後ろに梅の木あっかったそうだ、

そこさギリギリとつないで、
「ないな化物だか、明日起きて見んべ」
と思って、まずその人は火焚いて酒なの飲んで朝げになるまで待ちたところが、朝げになって見たれば、その梅の木がらみにないのだど。引張って行った跡あっけんど、そこさまず、その跡をただして、ずうっと行ったらば、小高い山みたいなとこさ行って、そこさ神様あっけど。そこの前さちょっと置いて、居ねごんだけどな。見たところが、大黒天と書かってたお宮だから、お大黒様に相違ないと思って、
「お大黒さま、お大黒さま」
というたば、「はい」なんて出来てきたそうだ。
「なんだ、お前だか、化物になって人を…。どこにいたのだか、化物知っていねか」
なて言うたどころが、
「おれだ」
なんて言うごんだど。
「なんだ、神様のだいして、人を苦しめるなんて、もってのほかの神様だ」
なて、見そこねること言うたらば、
「見ろ、おれぁ家見ろ、まず。雨はむって、とにかく入っていられるもんでなくなった。この有様見ろ」

と。そして村ではぜいたくのしほうずして、まず、ええあんばいに暮してで、おれぁどこと言うとこの様。ほだから、おれぁくったねない。戒めにおれぁ皆連て来んべと思った、ど。こういうごんだけど。そうすっど、

「いや、ほんじゃらば、まず、なんぼもええく思う通りにお宮なの拵う。さらって来たものどこさ置いっだ?」

と言うたところが、

「裏の洞穴さ入っでだ」

「ほんだらば、そいつ出せ」

と言うもんで、そこさ行ったらば、やっぱり。「早く来い」と言うたらば、痩せて「ありがたい、ありがたい」と、そこには大工もいれば鍛冶屋もいれば、なえでもかえでも居るごんだどな。その話したごんだれば、たちまち内に、そのお宮普請して、毎年お祭りして…、そしたらばその化物は出なくなったって。

んだから、神様ば祀っている限りは、お祭りでもなんでもして、神様というものは大切にさんなねもんだ。

笛吹き聟

宇治川のほとりに、橋姫というお姫さまの夫婦があったど。仲よく二人で暮し

ていた家だったど。

ある日、橋姫は、

「おれは海見たことないもんだから、ワカメというもの食ってみたい」

と、夫さ願ったところが、

「ほんじゃ、そがえなものなの、海さ行って取って来て食せっこで」

と、海さ、野越え山越え海さ行ったらば、いや広い広い、本当に砂の上に笛の好きな夫だったもんだから、懐から笛出して、笛吹いて、ずっと海辺歩いっだところが、そこの人が、

「お前は笛の上手だごと、まず竜宮の乙姫さまさ聞えて、お前を是非来てもらいたいと言わっだ。行ってもらわんねが…」

と言うたところが、

「んだな、竜宮さ行ったことないから、あまりええ」

と、こう答えた。そしたば、

「おれの背中さおばって、眼ひっつぶって呉ろ」

と行ったところが、とても〃竜宮のようなところだ〃ということはあるもんだ。とにかくええどこだけずまな。まず座敷さ上らせらっだところが、おじいさんとおばぁさんと娘と居て、

「聞かせて呉ろ」

そしたところが、とにかく上手な綺麗

な笛の音なもんだから、
「お前どこ、放さんねぐなったから、おらえどこの聟になってもらいたい」
「聟になるはええげんども」
と、そこで御馳走さっで、
「それはええげんども、おれはこの食物ばりでなく、人の飯を食いたい」
と言うたところぁ、
「そげなもの雑作ないから、どうか聟になって呉ろ」
と言わっで、知らず知らず月日を送ってで、それから、
「竜宮から送って行って、気に合った食物を上げるように…」
と、海辺に家建ってたところさ、つれて来られるところだっけもな。
「これはええごんだ」
と、いたげんど、橋姫の方は待てど暮せど来っざぁないもんだから、
「おれは海さ行って見っかなぁ」
と思って、野越え山越え行ってみたところが、海は広いげんども人もいない。そして見っじど、家が海辺にあるけがら、そこさ行って、
「笛上手なのが、ここ通んねがったべが」
と言うたらば、
「竜宮さ聟にもらわっだ。食物は竜宮の食物で分んねほでに、毎日ここさ来て、

食べるようにしてるから、また来るべから、そん時会うように隠っでいろ」

と教えらっだ。ほんじゃ、会われるなと思って喜んでいたところが、竜さなのって、みんなに送らっで来て、みんな帰って行ったそうだ。そうしたところが、

「早く会え」

と、その人から教えらっで、橋姫は、

「おれが行くべと思ったげんど、行かんねでこうした訳だった。すまなかった。二人でここを逃げる他ないがんべ」

と思って逃げた。そしてまた元通りに橋のたもとで暮した。

蟹の恩返し

あるとこに信心の娘がいて、仏の道さつかえて一生懸命で、お経なのばり上げでる娘。あるとき散歩に出きてみたところが、漁師の息子が蟹を採って来て、蟹を下げて来る。八匹の蟹、やんちゃやんちゃとして来っどこ見て、

「これは何するのだ。蟹をこがえに苦しめて…」

と言うたところが、

「おれは、こいつ炙って食うのだ。炙って食うとうまいもんだ」

「これは可哀そうに、おれの着物一枚と

取換えないか」

こう言うごんだど。

「あまりええ、なんぼ喜ばれんべ」

と、蟹と着物一枚と取換えて、

「蟹、蟹、決して見つけられんなよ。可哀そうに炙って食れっかったぜはぁ。このくらい苦しんだあげく、火炙りなの掛けられっこんだら、可哀そうだったなぁ」

と、放してやったらば、蟹はうれしそうにして皆帰ったど。そしてずっと、また来んべと思ったところが、草にガサガサというものあったから、蛇は大きな蛙見つけて、それ喰わえていたっけど。

「いやいや、この蛙も、こがえな蛇に食れるなんつぁ、むごさいもんだ、ほんに…」

と、よくよく見て、蛇さ言うたって分んねげんど、

「蛇、蛇、その蛙をおれさ呉ねが」

と言うたど。

「おれはお前のおかたになっから…」

と言うたら、パェンと放してやったごんだど。それから今度は、

「何時の何日で嫁に行くのええ」

と言うたそうだ。そして家さシオシオと来て、親達は、「何だ」と言うたところが、

「おれ、とにかく見かねて、蛇なの、こ

んげなこと言うたたて、来んめえと思って、こう言うたところが蛙ば放した」

「蛇というものは恐ろしいもんだぜ」

と、親達に教えらっじゃごんだどな。

それから親達も厳重に囲(いばり)はする、何はするなりして、

「とときさいことして頂くより他ない」

つうもんで、一生懸命、お寺さまに祀(おが)もうしたり、お経を読んでもらったりしていたそうだ。そしたら七日目の晩に、音するもんだから、親は何の気もなくて、一生懸命でお経上げっだどころぁ煙出しから、ドェッと落ちて来たごんだどな。今度はなじょになるもんだかと、お経上げっだところぁ、バタンバタンバタンという音する。プチプチプチなていう音する。朝げになって呉れればええと思って、一生懸命で、何の気もなくお経上げして、朝げになって夜明けてみたところが、大きな蛇が、蟹にあちこち食(か)っで、死んでいたっけど。

蜂の恩返し

大和の国に与吾大夫という武士がいて、その武士が城をもっていた武士であったそうだ。戦いに押し寄せらっで、城を陥さっで、そして自分が生命さえもあっど、

何時かなじょかなっから、おれは討死さんねと思って、山さ逃げて行って、五六十人しか、まだ残った者いないの、皆そっちこちさ隠っでいた時、与吾大夫は隠っでいたところから出きて、山をめぐってみたところが、大きな蜂は大きなクモの巣にからまって、ブンブンブンブンといたっけど。クモの巣から取って、

「お前も、たしか子どももいたべし、部下もいたべし、お前死ぬと困った者いたべから、おれはこれを逃がして呉る」

　というもんで。そしたば、その次の晩、枕元さ赤茶けたような者は来て、

「うーん、おれはお前に助けらっじゃんだ」

　と言うごんだど。そして、

「お前はまた戦さすれば、おれは確かに勝たせてやる」

「ほんでも、おれは五六十人しかいない」

　と言うたところが、

「五六十人の家来でたくさんだ。おれもこの山の家来は五六十ぐらいしかいないべげんども、そいつに皆加勢させっど、たしかに勝たれっから、こいつは本当のこととして、城というような恰好だけでええから建てて、そこさ敵が来たとき、城のぐるりさヒョウタンや徳利のような、スズのようなもんでも、ぐるっと、そこ

さ置いてくろ」

と、こういう風に言うて行ったど。そして家来さ行って、その話したところが、

「ほんじゃ、まず建ててみろ」

と言うもんで、まずあちこち城みたいな恰好に建てたところが、向うでは見つけて、まだ大夫はいた、あいつ殺さねうちは分んねから、いま一攻め攻めんなね、と言うもんで、また押し寄せて来た。そうしたところ、蜂はそれを聞いて、いっぱい家来どもら言いつけて、それ!!とスズのようなものさ皆入って待構えっだ。ところが敵が押し寄せて来た。今度は弓打つべと思うと、手刺す、面(つら)でも眼(まなぐ)でも皆ツクツクツクと刺して、とても戦さしていらんねくて、みな逃げて行ったど。そうすっど大勝利になって、蜂は六七十死んでいだっけど。それを掘って墓石を建てて葬って、お祀りをしたって…。んだから蜂だっても恩返しすっことある。

鼻高くなれポンポン

ある男が、稼ぐ嫌いで、何とかして安泰にうまいもの食いたくて、神様さ願かけて、

「どうか、おれぁ、安泰に食えるように

させて呉ろ」

と願ったところが、神様は打出の小槌授けておくやって、

「思い思いにこれで叩くじど、何でも出きる」

と、こういう風に夜もらったんだど。枕元さ。

ほんでまず、出はって行ったところぁ、旦那衆の娘は縁側に陽なたむくれしったど。そしたところぁ、そこさ、

「鼻おがれポンポン、鼻おがれポンポン」

と言うたれば、ずんずんおがるとこ見えっけごんだど。ほうしたれば、娘はぶっつかって、家の中さも入らんねような、高くなって、

「ああ、おれぁ鼻なじょになったんだか、見ておくやい、まず、なしてこがえになったんだか」

と言うもんで、泣き音聞きつけっこんだど。親達も、

「なえだまず、こげなことになったべまず、何かに刺っだわけでもなし…」

と、やぁやぁと、ころましい風だけど。裏かけて聞いてて、

「ほんじゃ、お医者だて言うたて、分んね風だけどし、占いなんて言うたって分んね風だけどし、こがえに鼻治して呉っこんだらば、なんぼ金など出すけん

ど…」

なて、音すっこんだど。そして二日、三日もよってから、

「鼻治し、鼻治しの妙法」

なてふれて行ったごんだど。そげな話語ってふれてる者あっから、聞いて来い、まず。なて召使い出したば、

「鼻なの、何病気でも、何でも治される」

「ほんじゃ、おれ家さ行って呉ろ」

なて、今度は喜んで入って行ったところぁ、

「広い、誰も入んないで、おればり入って、綺麗な座敷さやって呉ろ」

と言わって、娘と、そこの立派なところさ入れらって、何かちょっと語って、

「鼻低くなれ、ポンポン、鼻低くなれポンポン」

と言うたれば、段々低くなって、丁度ええ鼻になって、

「ああ、こんでまず決った」

なて。そうして出して二人で親達のいた前さ行ったら、いや、喜ばって、御馳走さって、銭など「なんぼええ?」なて言わって、一生暮すくらいもらった風だど。

それから今度は、

「こがえにええことは、あんがえに面白く鼻高くなるも、おれも一つ試してみんべ」

と思って、その神様のとこさ行って、まず蓆を敷いて、涼しいとこで仰向けになって、

「高くなれ、ポンポン、高くなれ、ポンポン」

と言うたところが、ずんずん天竺までも高くなって、今度は天竺で天の川原の橋拵えさ、ぶっつかったもんだど。そうしたところが、こんど、

「珍らしい、人間の鼻でないか」

という音は聞えたそうだ。そして「鼻つないでおけ」というもんで、橋の杭さギリギリとつながっだもんだど。いや病めて病めて仕様ないから、鼻低くなれ、鼻低くなれ」

と言うど、鼻つながっていたもんだから、低くなりようなくて、われぁ体ばりズンズンズンズンと昇って行ったごんだずも。そうして今度は温かい太陽の下さ行ったところぁ、自分が溶けて、ボタボタと落ちてしまったど。

あまり欲をしないように。

狐　と　狼

狐と狼、仲よいものいだったど。そして狐が冬越しして、腹も空きだしすっから、今度、子どもどらさも何か食いもの探

ねて来てくれんべと思って、穴から出てきて、道さ出はって、人に見付けらんねように、鼻クンクンさせていたところが、何だかうまい匂いすっこんだどな。

「ああ、魚の匂いする。ほんじゃまず、あれ一つ取って呉ましょう。ほんでもなぁ、ちょえっと昼間なんだし、とるということ行かねから、死んだふりするより他ない」

と思って、賢こい狐なもんだから、ワラワラと、道傍から出はって行って、向うから車引いて来る魚屋に見付けらんねように出はって行ってって、死んだふりして、口など開いたりしていたど。そしたば、車引いっだ魚屋二人、

「いや、狐でないか、色気のええ狐だ、狐だ、あいつ何だえ、病気でもして死んだんだべちゃなぁ、何されでいたんだか、死んだようだ」

と見てたようだけど。

「まず踏んでみろ」

と、踏まって、

「痛いげんども、そいつ堪えないげれば、おれぁ魚とって食うこと出来ないから、まず」

と堪えて堪えていたごんだど、狐は。

「ああ、死んだのだ。こりゃ、なじょしても何も音も立てない。死んだなだ」

なて、

「こいつ、皮屋さ売ったらば、大したものだなこりゃ。今日は魚を売ったり、皮屋さ行ってこいつ二人で分けたりしたらば、大したもんだ」

なて喜んで、

「ほんじゃ、車さ上げろ」

なて、狐を持って、魚入っでいた篭の中さ、クィンと上げてやったど。そしたら狐はよろよろとなった。まず魚屋は車引いて行った。喜んで食うだけ食って、こんど、狐は持がれるだけ持って、ピンと落ちて、ワラワラと、われ家さ行ったそうだ。そしたらば、魚屋、町さ行ってみたところぁ、まず魚は少しあるだけで、みんな無くなって、

「いや、狐に騙さっだとは、そいつのごんだ。畜生！」

と言うもんで、今度はごしゃやけて、狐に騙さっではいらんね、と言うて、言うたたて分んねんだし、また次の日、問屋から魚持って来た。

一生懸命で炙ったり食ったりしていたとこさ、狼ぁ来て、

「狐どん、狐どん、何としった。何だかうまい匂いさせっだな」

「おれに少し分けて食せろ」

「まずまず、ちょっと料理しないうちは、

来らんね。料理したら、食せっから…」
と言うもんで、せっかくうまいどこ戸棚さ入れたり、食ったりして、うまくないとこ、ちんと狼に食せたど。そしたば、
「こりゃ、うまいことしたもんだね」
「雑作ない、こがえなことなど、俺は死んだ振りしていたところが、おれどこ幸いに魚の篭さ入っじゃずもんだ…」
なて、話ポウポウとした。
「ほんじゃ、明日、おれぁすっかなぁ」
「明日しろ、おれぁ行かねから、あんだそういうにして食え」
と言うもんで、その日別(わか)っで行って、明日になるのばり待ちて、また行ったら、やっぱし魚屋が向うから来るの見たどな。そして狼は死んだふりしていたそうだ。
そしたば、
「何だ今日は狐でなくて狼だ。こん畜生、ほに、おらだ騙さっでいらんね」
つうもんで、今度は太い棒持(たが)って来て、叩がっだ、叩がっだ。そしてとっても生命からがら狐のどさ逃げて来たごんだど。
「いや、とんでもない目に会った。いや、叩がっではぁ、生命からがら逃げて来た。あがえなこと教えっざぁ、あんまいちゃえ」
「教えっざぁ、あんまいちゃえ、なんて、ほんじゃ、お前、おらだなんぼ痛いったっ

て堪えっだ。ほんじゃお前、堪え足んねのだ」

なて言わっで、その狐もまた、その日、

「何か食いたいなあ、ちょっと誰か来ないかなぁ」

なて、また朝早く食いもの探ねに出はったど。そうすっど、坊さんが向うから一背負い背負って来て、

「あいつはなまけ者でないから、騙すことは出来ないな。なじょしたらええんだがなぁ」

と、道の端に隠って見っだところが、坊さんがチャンコ・チャンコと、重たくて、したらば、一箱ポテンと落ちた知らねで、行ったごんだずもな。

「いや、そいつはええ、難儀もしないで拾わっだ」

と思って、ワラワラその煎餅を持って行って食っていたら、狼行って、その話。

「いや、ええこと、今度ないかい？」

と言うたらば、

「こういうことした、おらだ」

「貴様、ええことばりするねえ、おれさ教えろ」

「教えたげんど分んねじだい。痛い堪ねで逃げて来たがらざぁ、おれだ、誰か間抜けな者いないもんだから、騙すことできないんだじすっじど、とんなええご

んだ。坊さんは、煎餅とは思わねがったな。饅頭とか油揚だと思ったら煎餅だ」

と、二三枚もらって食ったど。

「いまっとええことないかい。おれももっと食いたいなぁ」

「晩げ、あの坊さんがお寺の本堂さ、確か、お供えするに相違ないから、ほんじゃ晩げ、おらだ食って来たらええんねが」

「あまりええ」

と、二人で相談して、

「まず途中から本堂さ行くには、寺の前から二人で掘って、本堂さ行くより他てない」

「そげなごどなど、雑作ないずだ」

と、二人で行って、一生懸命で穴掘って、くぐって行って、本堂さ出きて、本堂の縁の下から入って行っていたば、全くうまいものは、本堂さ飾らっていだ。肉でも何でもあったど。

「これはええどこさ案内して呉れたもんだ」

と言うもので、喜ばっで、そして戸棚開けてみたら、葡萄酒なの、盃なの、なんでもあっこんだど。「これは」というもんで、狐は入って、

「さぁさぁ、早く葡萄酒飲め」

と飲んで、狼さ一生懸命飲ませて、自分は飲んだふりして、すうっとそっちさ

空け空けしていたごんだど、狐は。
そしたところが、
「こがえに御馳走になっては、何かお経でも上げて行かんなねごで」
と、狐は言うたそうだ。そしたば、
「そうだごでなぁ」
と、狼は衝立さ衣かかっていた。その衣を狐から着せてもらって、引出しなのあるの開けてみたら、剃刀でも鋏でも何でもあるけごんだど。そして、
「お坊さんになるには、髪おやしたお坊さんはいないから、おれは髪はさんで呉れっから…」
なて、狐はパキパキと、耳の辺りから皆髪はさんで呉て、そして今度は、
「本当の坊さんになった。鉦叩かんなね、まず、お経を上げっどき」
なて、狐に言わって、ゴエンと上げて、ワンワンワンワンなんてお経上げっだど。そしたら、
「もっと大きく鳴らさんなねごで」
なて、ガェンガェンガェンなて鳴らしたど。そしたら、寺さ聞きつけて、
「何だ、不思議な、今頃鉦鳴らすなて、とんでもないごんだ。何者だか分んねごんだから、行ってみんべ」
と言うもんで、小僧どこ起してやってみたらば、小僧は節穴から見たら、とん

でもない者、お経を上げっだもんだから、腰抜けになって動かんねくなったもんだど。こんどあまり来ないからどて、また別な小僧やったれば、そいつ聞いて、

「何者だか、唯事でないから人呼ばって…」

だと言うもんで、

「とんでもない者、鉦鳴らすから、みんな寄って呉ろ」

みんな棒や木刀など持って来たば、やっぱし狐は賢こいもんだから、先の穴からズウンと抜けて行って、跡さ板蓋しったとこだど。そしたば、狼ばり魂消て、狼はワンワンワンワンとお経上げて、みな魂消ているうちに、

「この畜生!!」

と言うもんで、狼ぁ下から来たもんだから、逃げんべと思ったら、蓋されていて、逃げらんね。何とピンピン・ピンピンと騒いで、天井見たら拍子ええぐ、高窓あっかったど。そこからピンとはねて、ワラワラと「狐の野郎に騙さっだ」と言うもんで、またかけて行ったところが、狐は戸の口にいたけぁ、

「おら、おれ、やっと今来たばりだ。まず何とかして早く来ればええと泣いっだどこだ」

と、狐に言わっではぁ、正直な狼なも

んだから一食(ひとく)いにしてくれんべと思って来たげんども、そういうもんだったかと思ったど。そして、こんど、

「いやいや、何とでも自然に人の手に掛かっとこだった。んだから貴様どこ生かしてなの置かんね。何でもこの通りだと思って来たどこだ」

なて、ごしゃえたげんど、賢い狐にとうとう負けたから、賢いものに敵わね。

日本一の相撲

どこの国だか、日本一の相撲とりいだったそうだ。その人が足駄の頑丈な履いて、家の近間の川あっどこさ、涼みに行ったそうだ。

そこは何か、葭(よし)なの茂って、木はある。綺麗な川でもないげんど、涼みに行ってたところが、波立たせて行った。そしたば、蛇の尾、バエンと足のところさ寄越した。足駄をギリギリと巻いたところが、ビリビリ・ビリビリと足駄の歯欠けたど。

「あら、蛇の畜生だな、こりゃ」

と。そのうちに足を巻いてツラツラと連(せ)て行かれそうになった。そんで蛇に負けていらんねというもんで、ドスッと腰降ろしたところ、その上はへっこんだそうだ。先ず一生懸命で蛇は引張る。相撲

は負けていらんねと思って、ドシッとする。そしたばパキンという音したところぁ、川が真赤になったどこだど。

「これは、蛇は負けたな」

と思ったところぁ、弟子どもら来て、

「見ろ見ろ、蛇はおれぁ巻いてあるの取れ」

と、蛇の巻いたの、取らせたら、蛇のしるしは、でっつりと着かって洗ってもとれっざぁないど。それから、近所の人も魂消て、話きいて来て、

「酒で後を洗うと取れるったんねが」

なていう話で、洗ったら取れたど。それから、弟子どもらさ、

「蛇はずいぶん力持った。お前方縄でおれぁ足引張ってみろ、なんぼあるもんだか」

と、十人かかってもかなわね。二十人、三十人したば蛇の力ぐらいの出来だど。蛇の力の恐ろしさに魂消たど。三十人力あっかったど。

ライオンといるか

ライオン、年取ったの、仕事もさんねし、働いても食んねんだし、海辺さ行って、ずうっと海辺を歩ったところが、いるか見つけて、

「いるか、いるか、おれと話しろ」
と、そしているかと話して、
「おれはこういうもんだ、まず、ほんじゃ友達になって、お前いろいろな時、どっちも助け合いして、まず友達になっていっど、ええがんべな」
と言う二人の話でいたところが、ライオンが何かにやって、年を取ったもんだから、敗けそうになって、海のいるかどこを呼ばったそうだ。海のいるかはそういう風な話だけげんど、とにかく陸さ上がってみれば、分んなくて、唯そういう風な音きいっだだけで、助けに行がんねがったそうだ。ライオンが、
「嘘語って、おれぁああいう風に苦しんだとき、丁度海にいてで来ないざぁ、あがえに約束したな」
なて、まずごしゃえだごんだ。
「おれは海の者だほでに、陸さとっても上らんねがら、陸と海のもの、友だちになったって、分んねこりゃ」
と分ったど。

耳なし芳一

源氏と平家が戦って、平家ぁ敗けて、壇の浦の戦いで平家は皆死んで、平家蟹なんていうのまで背中さ喰付いていたと

いう話だぜさなぁ。人の背中さ背負ってるなんて…。

そん時、あまり亡魂が出たり、いろいろするもんだから、赤間が関という浜さ、安徳天皇を先にして、ずうっと名高い人ばり、石灯篭立てて皆しるしつけて置いっだどこあるぜなっし。そこの話。

芳一という人は、赤間が関というとこで生まっで、眼見えなくなっていたったそうだ。それで琵琶好きで物語なの、とても上手で、歌など歌っている人、いだったどな。そうすっじど、まずそいつは話になって、神降しして墨染めの衣着て、琵琶持って、廻って歩いたもんだった。そうすっど、法師という者では皆に名知らっで、ある晩、和尚さまのところより貧乏だったもんだから、和尚さまもそういう音曲好きなもんだから、寺さ、

「おらえさ、泊ったらええでないか」

と言わっで、喜んでそこの寺さ泊って、そういう風に語って歩いっだもんだってな。そしてある晩、和尚さまは、

「死んだとこさ行かんなねから…」

と、芳一ばり置いて弟子と行ったところが、さぶしいようだし、あまり暖かいから寝ても寝苦しいからと思って、裏口から湯さ出きて、裏門のとこで琵琶ひいて歌うたっていたところが、そこの廊

下伝えて来て、「おーい」と言わっだもんだから、何だか身さ、しみ込むような恐ろしい、当り前の人でない武士のような音だごんだから、ふるえながら「はい」と言うたところが、

「おれが、殿様から、お前の歌聞きたいと言わっだから、行ってもらわんなね」

と言わっで、

「そがえなとこさ、おれなの行きたくない」

と思ったげんども、その人に手引かっで、

「行って聞かせて呉ろ」

と。

「是非聞かせてもらわんなね」

と、手引かっで、その手の冷たいことは、鉄でも抑えたような手だったど。そしてガタンガタンというな着物は音立てる。不思議だと思って、

「鎧であんめえがな、この音」

いやいや、早くて早くて、芳一は草履はいてワラワラと行ったど。そしたところぁ、

「戸開けろ、門あけろ」

なんて、その人言ったば、門などギィーと開けて、そうして「入れ」なんて言わっで、入ったところがまず、とんな立派なような様子で、奥の方さあえべなんて

行って、そこで、
「一つ聞かせろ」
なんて言わって、聞かせたら、
「何ぁええ？」
なて言うたところが、
「源氏と平家の戦いのとこ聞きたい」
「そいつは一晩・二晩では分かんね」
と言うたら、
「長くてええから聞せて呉ろ」
と。そして、
「あと、かまわず来て聞せてけろ」
と言わっだもんだから、まず張上げて歌ったところが、皆すすり泣きはするという、合奏は上手だなんて手は叩いたりして…。ほだほでに、今度は張上げてビンビンと歌ったところが、こんど次の晩も和尚さまが不思議になって、
「何だか語れ」
そして、よっぽど若衆いたのさ、
「まず、みんなで、どこさ芳一が行くか、芳一の跡ついて行ってみろ」
と、若衆さ命じたところが、芳一はやっぱし、またその者ぁ来て、芳一の手ひいて、雨降りの晩だったそうだ。つれて行かっだど。
「あら、芳一」
と言うごんで、提灯つけて若衆はその跡つけたげんど、早くて早くて、追っか

付かんねくて、
「なんだ芳一、なんだまず。こんげなとこさ来っざぁ」
どて、とにかく芳一どこ探ねらんねぐなったから、帰んべと思って、その墓場どこさ出きたら、芳一は一生懸命、各々墓の前で唄っていたんだけど。「なんだ！」と、芳一どこビリビリと引張って、
「こがえな、何だ。お前だ無礼だ。こがえな屋敷さ入って来て、そうしておれどこせて行くざぁない。なんぼお叱り受けっか分んねから」
なて言うげんども、ビリビリ連て来て、こんどは坊さんが、
「なんだ芳一、とんだ死病に喰つがっでいたぜ、そがえなとこに、そがえなええ家などあるもんでないんだ。墓場だったそうだぜ、なえだまず」
こういう風なわけだぜ、そこはお前、亡魂にねらわっでいたんだぞと教えらって、
「ほんじゃ、今夜お通夜すんなねほでに行かんなねから、まずととさいお経を皆お前どこさ書いて行くから、決して、なじょなことさっじゃて、音立てねで…」
と、足の下から、何から皆書いてもらって、また、
「同じとこさ、かまわず坐ってろ」

と言わっで、またパタンパタンと音して来たもんだど。そして、

「何だ芳一、心変りしたんねが、なんぼ探ねてもいないな、芳一、芳一」

と呼ばらっだげんども、黙っていたど。琵琶ばりそこにある。

「奇態だな」

と、その人間がつぶやいたど。そうして今度ぁ芳一は心の内に恐なくていたところが、

「なんぼたねても、芳一いないな」

そして芳一の耳ざぁ、拍子悪く、弟子ぁ耳さ書くの落したそうだ。そうすっじど、その耳見つけて、

「ほんじゃ、おれぁ芳一連て行かねじど、お目玉喰うから、この耳を持って行かんなね」

と言うもんだから、ビリビリ引張ったごんだど、亡魂に。そうして、耳引張らっで取らっで、そんでも痛いとも言わないで、

「こいつ、音立てたり、何かえすっど、生命ないもんだから、音立てらんね」

と思って、我慢して涙こぼし、涙こぼしいたところが、そのうち和尚さまは帰ってござって、

「むごさいことした、耳さ書かねがった」

と。そうして和尚さまは一生懸命で治

しておくやって、耳なし芳一となったど。

和尚と狐

専称寺という寺、山の上に建ってで、そこの山さ狐など巣くっていた山だったど。そしたばある日、専称寺の屋敷さ、不思議なような者来て、

「坊さん、ここは専称寺という村の寺だな」

なて、言う者ぁ来て、

「専称寺にトウリン和尚という和尚さまの、立派な和尚さまで、太ったのいだの、おれは親に聞いっだ」

と言うごんだけど。そしてトウリン和尚は、

「何しにお前ここさ来たなだ」

と感づいて聞いた。

「これが村で一番高い立派な建物だから、これを見に来たどこだ」

こういう風に言う。

「こりゃ、狐の畜生だな」

と思って、そしたば、その狐が言うには、

「おれはこの寺は村のものでなぁ、おらえのお父さんがここの村で生まって、寺のとこに学校があって、そこに狐に憑かった生徒がいたということ聞いっだ」

と。こういう風に言うごんだど。トウリン和尚も、

「ほだ、おれも聞いっだ。その生徒は名呼ばっても分んねくて、みんなで心配して、それに名を呼ばったりしたところが、青ざめてふるえっだな、狐の性だど、ヤァヤァと言う内に、狐ぁ気付いたったということ、親に聞いっだ」

なんて言うごんだど。トウリン和尚も、

「おれもその話聞いっだどこだ」

そして和尚さんに向って、

「この寺はええ寺だけども、村のものだごでな」

「そうだ、村のものだ」

狐さ向って、狐だと思ったもんだから、トウリン和尚は、

「お前、ここの主のようなこと語るな」

と言うと、和尚さまさ、

「お前はここの何だ？」

と言うけぁ、

「おれはここの番人で、この寺をええあんばいに守って、朝晩鐘ならして村さ響かせ、山さ響かせて、ここを守っている者だ」

と言えば、とうとう狐はかなわねくて、本性あらわして、頭さ手あげて逃げて行ったという話。

孔子のはなし

孔子という人は、おっかさが仲々偉いくて、一人の人間にするには、そちこちのことを聞せたりそちこち習わせなくてなんねと思って、町さやって、売りどこ見せたそうだな。

そしたところが、やっぱし家さ来て、みんなと友達あつめて、「買わねえか」「いやなんぼだ」なんて言うことばり言うて。そうすっど、困ったと思って寺さあつらえたところが、この通り葬式の真似はする、お経の真似はするで、まず遊んでいる。

「これは学問させる他てないから、学者さあつらかなくてなんねえ」

と、あつらえて、そしたら嫌(やん)だくて、途中にして逃げて来た。そしたらばおっかさ機織りしったの、その機をバギバギと鋏んで、

「ほれみろ、途中にして切っじど、こういう風な機と同じで、この機切ったの、何にもなんね」

と。賢こいもんだから、よくよく感心して、また寺さ行って学者に学んで偉い人になったそうだな。

ある時、世の中ずっと渡ってみんべと思って旅に出たとき、宿屋さ着かない内

に、草原のとこで暗くなったそうだ。んだから草上さ、木枕にしてねんべと思って竹棒で草叩いてみたところが、何かポンポンというものあるから、見てみたら、髑髏（しゃれこうべ）あったそうだ。そしてそれに向って、

「髑髏、なんだ、こんげなとこに、こんな住みようしているものは、まず人間の内にはええことした者ではないと思われる。人を殺して隠れ人になって死んだか、強盗したか、喧嘩してこげなことになったか、ええあんばいな死様（しにざま）して、ここに、雨にさらされ、風にさらされて、こげにしているもんでないんだ。親もいだったべに」

なて言うようなことで、

「今度もう一度世の中さ出きて、立派な世の中を面白く世渡りしたらええがんべに」

なて話語って、

「今晩、この頭を枕にして寝っかな」

なんて、髑髏枕にして寝たそうだ。そしたところが、夜中に、

「おいおい」

なんていう音すっから、「誰だ」なて暗くて見えないんだし、

「おれは昼間質問さっだ髑髏だ」

なて言うごんだずも。

「はぁ、そうか。お前に何か質問さっだげんども、おれぁ語ることがない。こがえにええ世の中さ来たから、何にもおれの語る問題としてはない」

と言うたごんだど。

「ああ、そんだか、この世の中くらいええ世の中はない、殿様であったたて、なえだてほがえに世の中のええどこざぁ、あるもんでない。汚ない人間さ交わっことはないし、世の中さ何にもかまいもないし、自分の思うようにこうしている。おれはこの世ええくて、二度と生まって行かない」

なんて言うごんだどな。その髑髏が。

「そうか」

孔子は朝起きて、また旅に出きて、世の中みな見て、家さ帰って来てみたところが、国はもめて仕様はない。帰ってさえも来っじど、国王になってもらいたいという話で、使いの者はいっぱいお土産なの持って来たげんども、

「おれは決して上になんつぁなるもんでない、自分が思うように世の中に出るくらいに面白いことはないから、決して上になの立たない」

そういう風に言わっだもんだから、帰って行った。使いの者が帰って言うたら、

「もう一度まず願って来い」
と言わって来たら、その通りで長生きするには上さ立って、心配なのしてられるもんでない。世の中見て面白く暮した方が、なんぼか長生きのもとだから、決して国王にはなんないと言うて呉ろ」
と帰してやった。とうとう上に立ったことはないくて、死にやった人だどな。

桃太郎

子ども持たないで、正直に暮しったおじいさんとおばぁさんあったど。
そして、ある時、おじいさんが山に柴刈りに、おばぁさんが洗濯に川さ行ったところが、大きな桃が流っで来たから、
「あらら、これはおじいさんがなんぼ水飲みたくてござんべがら、これもって行って、二人で分けて食うべ」
と思って、
「こっちゃ来い、こっちゃ来い」
と言うたば、おばぁさんの前さ来たから、それを拾って前掛けさ取って、神様さ上げ申しったところが、おじいさんが、
「こわがった（疲れた）」
なて帰って来て、
「おじいさん、とんな大きな桃拾って来った」

と行ってみたところが、まずまず魂消たことには、二つに割れて、そこから大きな男の子は生まっでいたもんだから、

「おじいさん、早く早く」

「なんだごんだ」

と、おじいさんが寄って行ってみたば、男の子のめんこいな生まっでいだど。

「あらら、おらだ子どもないから、まず子ども授けておくやったんだべから、まずまずお湯わかして洗って呉れて、まず」

と言うもんで。

ほうしたところが、ほんとに元気な子どもでタライでも何でも持(たが)くオボコだったど。

「これはこれは、天の与えたこういう風なもんだ」

なんて喜んで、

「おじいさん、こがえなええ子ども、なんと名付けたらええがんべ」

「桃から生まっだがら、桃太郎と名付けてええがんべな」

なて、二人は喜んで、桃太郎と名付けて、

「何好きだ、桃太郎」

「小豆飯(あずきまま)さ、魚(とと)かけて好きだ」

と、おばぁさん、魚買って来て、食せて、小豆飯炊いたところが、何杯も何杯もたちまち内におがって、あるとき、

「おばぁさん、おじいさん、お願いします。鬼が島さ鬼退治に行きたいから、日本一の黍団子拵っておくやい」
「鬼なんどというものは、そがえな小っちゃいの食れんなぜ、鬼に」
「いや、おれは征伐して、人を苦しめるそうだから、征伐して来っから、まず日本一の黍団子拵っておくやい」
おじいさんとおばぁさんが、トンカトンカと叩いて、日本一の黍団子というもんで、うまく拵えて袋さ入っで、そして発たせてやって、
「鬼に食んねように征伐して来いよ」
と。そして途中さ行ったところが、犬がワンワンワンと吠えて、
「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらさござる」
「おれは鬼が島さ鬼退治に行くとこだ」
「ほんじゃ、おれもお伴するから、一つ団子を下さい」
そして呉れたところぁ、食って、こんどはまた途中さ行ったところぁ、バタバタ、バタバタと。上見たところが、キジが降りて来て、
「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらさござる」
「鬼が島さ鬼退治に行くとこだ」
「おれもお伴したいから、黍団子を下さ

い」

と言う。そいつを呉れて、キジを先立ちにしてまたこんど行ったところが、ガサガサ・キキ…というから、見たところが、赤い顔面して猿ぁ来て、ちゃんと前さ来て、おじぎして、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらさござる」

「鬼が島さ鬼退治に行くとこだ」

「おれもお伴させて下さい。腰につけた黍団子一つ下さい」

そこでまず、みんなで分けて食って、山さキジは先立ちになって行ったところが、やっぱし鬼が住んでだ鬼が島は大した城なの拵えていた。

「ああ、人くさい人くさい」

なて、キジはどんどん叩いて、中から錠をはずして、入って行ったところぁ、全くええどこで、桃太郎が不意に行ったもんだから、キジはケンケン突っつくという、犬はワンワン噛つくという、猿はかっちゃばくという、てんでに逃げて、その一番と鬼のところさ桃太郎はかかって行って、

「降参だ、これから決して悪いことしないから、どうか生命ばかり助けて呉ろ」

と願わっだもんだから、

「ほんじゃ、宝物を出せ」

と、そうして宝物を出させて、みんなそいつを持かせたり、引張ったりして来て、おじいさんもおばぁさんも食わってしまったかと思っていたところが、帰って来たので、喜んで、殿様からお賞めをいただいて、大した桃太郎の手柄だったど。

中将姫の曼陀羅

中将姫という方は機織りの神様だった。そしてお曼陀羅織りというの、その人発明しておくやってそれから綾錦なて織るようになったど。そのお曼陀羅織りのとき、糸はこごって、その機織りのとき、その糸なくてはなんね糸は、こごった。

そうすっじど、神様さお願いして、

「おれはお曼陀羅織るのだから…」

と、〃中将姫のお曼陀羅、中将姫のお曼陀羅〃、というもんで、一生懸命でとなえ方したところが、自然と糸はほごっで来て、その機、満足に織ったという。

また裁縫のとき、あるお姫さまが衣縫うに針なくして縫わんねごとあった。そんときのとなえは清水が音羽の流れは細かったり太かったりしないで、かまわず出きているんだと、だから、

清水の音羽が滝が止まるとも

失せたる針は出ぬこともなし

強盗と領主

摂津の国に、夜になっど何彼に、だっでく思っていた強盗がいたっけそうだ。その強盗は寒くなったもんだから、追剥してくれんべと思って、夜まず道の端さ隠っでいたげんども、人通るにはええあんばいな着物きた者もいなかったもんだから、

「誰も今夜着物剥ぐこと出来ないな」

と思っているうちに、向うから笛の音するもんだから、何者だかと思ったところが、袴なの履いて、面立ちなのとって、何か烏帽子みたいな冠った不思議なような人が、これは着物ええの着ったべなと思って、その人、ぽえっと出きて、ふさがったところが、その人に睨らまっで「何者だ」と、こう言わっだところが、身ぶるいするくらいに恐ろしい気して、

「おれが、こうこうしたもんだ。むごさいものに生まっだもんだな。人間と生まっで、夜、こげなことして人から盗って、恐っかない思いして、縮んでいなくてなんね。むごさい人間だな」

と言わっだど。

「それより、良い心をもって、よく昼間

みんなと応待して世の中面白く過したらええんねが」

と、そこで言わっで、

「おれぁどこさ、ついで来い」

いや、逃げたくなったげんど、逃げたらその人に抑えらっだら、なじょなことされっかと思って、逃げもさんねくて、かまわず行ったところぁ、ええ御殿のような門の中さ入れらっで、入れと、入ったところが、

「そういう風な心を持たないむごさい者というもんだべ。この上なし、むごさい者だ。何でも不自由なものあった時には、悪い心出さないで、おれぁどこさ来っじど、何でも呉れてやるから、綿入れ欲しいごんだら、綿入れくれる」

と言うもんで、新しい綿入れもらって、

「また来いよ、おれは摂津の国を守っている藤原保昌だ」

と言うたど。

帰らずの山

越後に帰らずの山ざぁ、あっかったどな。

その山さ行って、洞穴あるそうだなっす。その横穴さ入って帰って来た人ざぁ、いないくて、帰らずの山という。

その山さ、ある神主が、山さ行かんねと言うことではなんねえから、山の神さ御祈祷して、冠かむって山さ神官が入って行ったそうだ。そしたればどこまで行っても暗い、松灯つけて行ったところが、向うにヒカヒカヒカと、綺麗なようなところあっかったど。そこまで行ったところが、川なのあって、石なの何綺麗なんだか、とにかくええどこあっかったそうだ。そしたところが、その脇さ現われたのは、大きな蛇、とんぐりまって川のぐるり綺麗にしているのだっけど。そしてその蛇の言うには、

「越後というとこさ、山にこういう穴あるどこで、この山さ悪者住まれっこんだらば、越後というものは、発展ができない。家建つということは行かない。んだから、おれは神様のお使い者で、ここ守っていんのだ」

と言わっだど。そして、

「んだから、こういうこと、みんなどこさ、こういう者いたということは知らさないで呉ろ」

と語るのだけど。それからその人は帰って来て話して、悪者がいつか来て、山さ住むど、とにかく家なの建つことできねから、守っていておくやんのだど。

播州赤穂の皿屋敷

播州赤穂にええ殿様いて、あるときうんと酒盛しなくてなんなくて、ええ器物みな出して大々と酒盛りあっかったそうだ。そうしたところが、一枚の皿、一枚・二枚・三枚…と数えて、一枚足んねごんだけどなぁ。

ある悪い人は、その皿、ぼっこしたものやら、隠したものやら、とうとう無いくて、正直な御飯炊きさ、かぶせらって、「おれしない」と言うげんども、そこのその者にさっではぁ、

「何とも罰は罰に何されるもんだか、何だか生きっだて、ひどい目に合せられんのに相違ない」

どて、ある晩、井戸さ入って死んだごんだずもな、その下女は。そしたば、こんどはその疑った者が、早く水汲みして下女さ手使うべと思って、機嫌とりに早く井戸さ行って水汲みしたところが、重たいなぁと思ったところ、釣瓶さ、またがって髪ざんざらとさげて、死んでだごんだずも。いやそれから大騒ぎになって、

「こがえに堅い者は、死んでから仕様ないんだし、ええあんばいに葬って呉るより他ないがんべ」

と、殿様が葬って呉て、何でもかんで

も晩になったところが、その下女の部屋から、パタパタパタと草履をはいて、台所さ来て、

「一枚、カチャン。二枚、カチャン…九枚、十枚、ないか」

と、井戸さ、ポーと入る音、かまわず続くがったど。

そうすっどさぶしくって、みな居らんね、居らんねと、来る者ない、逃げる者ばりではぁ、なんと段々に滅びて、播州赤穂の皿屋敷という名で、殿様も滅びたど。

鮎売り与吾兵衛

菖蒲に鮎売りしている与吾兵衛という人は、むかしいだったそうだ。その人はあるとき、

「鮎、鮎」

と、箱かつねて来たところが、帰って行くときはぁ、風吹いて、あんまり風吹くなぁと思っているうち、つむじ風で、みな木の葉なの、その上さ登って行くではぁ、

「んじゃらば、こりゃ困ったな」

そのうちに何でもかんでも天さ連(せ)て行かれる。おれまでこりゃ天さ登らせら

れっど困っから、まず桑の木さでも登って、というごんで、すっかり鮎箱なげて、そして桑の木さ、たぐりついっだって。

そしたところが、鮎箱なの見ているうちにはぁ、天さ登って行くって。そうしたところが、自分が登っていた木、根ン元(もく)ずれ自分が天さ持って行かれたど。そしたところぁ、広いとこさ、ちょいと来た。

「困ったこりゃ、天竺さ来たじなだべな。おれぁ腹減ったげんども、こりゃ、飯(めし)食うとこがない。困ったもんだ」

と思って、四方眺めてみたば、向うに杉の木みたいなもの見えるから、そこさ行って誰か居たかも知んねと思って尋ねて行ったところが、この鳥居なの立ってた様子だけ。そこさ入って行ってみたば、やっぱし立派なお堂でもないようなとこあるけぁ、それから今度は、そこさ行って、

「お願い申す」

というたところぁ、「おう」と言うけぁ、ドシンドシンと歩(あい)で来たもの、お雷さまだったど。そうすっど、

「いやいや、こういうわけで来たげんども、腹減ったげんど、食うものない」

そうすっじど、こんどは、

「なんとか食うものをいただきたい」

と言うたところが、

「おれが食物とて、持たないげんど、臍漬けざぁ持った」

といわっだど。そしてその臍、腹減ったもんだから、

「臍漬け、たんともないもの、段々に臍漬けもしておかんなねなぁ」

と言うごんだけど。

「食ったこともないもの、腹減って困ったこんだ。行くには行かんねんだし、こりゃ、一ついただく」

なて、願ったそうだ。そしたれば、今度、

「たんとうまいとこでないでば、ひっついっだどこ持って来た」

なて、来たけど。いや食ってみたば、うまいにもうまいにも、

「こりゃ、いま少しないか」

というたば、

「段々、臍抜きに行かんなねべどて、いたどこだ」

といわっだど。それから、

「行くどこもちょっと見つけらんねし、どうか泊めてもらいたい」

「ええごんだ」

「ほんじゃ泊れ」

といわっで泊った。

「あした、まず荒砥の方から菖蒲さ、ずっ

と雨降らせなくてなんねから、ええごんだ」

といわっで、

「風の神に、電光、お前はこの甕、水入っていっから、ツンツンとこぼして、こがえな小さな甕だげんども、なんぼでも水入ってた」

と。そして、

「甕持って、お前はツンツンとこぼせばええ」

というたば、

「風の神さまにも言うていたから、明日来るから」

そしたば、大きな袋持って、風の神は来たけし、それから雷光、また火打ち石持って来たごんだけど。そしたところが、こんど、風の神はツンツンと口開けて、ふうっと放したば、

「なえだか、空曇ったようだな。風も出てきたし、お雷ぁ来るんであんめえか」

なて、下で音すっけど。そしたば、その内に、ヒカヒカと火打ちカネで雷光した。

「あら、雷光だ」

お雷さまは太鼓を打って、ドンドーン。そしてまた与吾兵衛はツンツンと先のうちぁこぼしったど。

「雨ぁ降って来たから、洗濯もの早く入

れろ」
　なていう音する。
「ここら、まず荒砥であんめかなぁ」
　と、自分が思っていたど。ところが今度はいっぱいこぼしたもんだから、
「いやいや、困った困った。まずまず水増しもできるようだ」
　なていうもんだから、
「たしか、菖蒲の方さでも来たかな」
　と覗首（のぞくび）したところが、ドエーンと落ちたことだど。そして池のようなとこさ入って行ったど。そしたば、われぁ土地だかと思うようなどこで、
「与吾兵衛という家ぁないがんべか」
というたれば、
「与吾兵衛ぁ、ああいう風に行ってから帰んないもんだ。どこさ行ったもんなんだか、心配しったけぁ、まずみな死に絶えたごんだはぁ」
　といわっじゃごんだど。与吾兵衛の家はここらであったし、墓さでも行って手合せて来（く）んべどて行ったば、草ぼうぼうと立っていたもんだけど。
「ほんじゃ、草ばりもむしんべ」
　と思って、アンアンと泣き泣き、おっかさんの髪、ビリビリ引っぱって泣いっだけど。
「与吾兵衛、そんがえな夢見てなえだ。

おれぁ髪引っぱって…」
　といわって、目覚してみたば、夢だったど。

炭焼きじじい（狐むかし）

　むかし、三平じいさんという、山さこもって炭焼きしているじいさんがいだったそうだ。そのじいさんがある晩、山道を通るとき、なんだか今晩がおかしげな寂しいような晩だな、と一人口たって、煙草のみのみ行ったところが、少し行ったれば、煙草の火ぁ消えたごんだど。
「こりゃ、煙草の火、消た」
　まず、ひきガネ（火打ちカネ）で火つけんべと思ったところが、煙草さ決して点かねごんだど。そのうちに、生臭いような、異なような風が来たど。
「はぁ、何かあるな、こっ寂びしいようだな」
　と行ったところが、侍みたいな者と、後ろさついた付き人。付き人は提灯など持ってだけど。あの火貰うべと思っていそぐと、急ぐほどその者も行くごんだど。不思議だなこりゃ、と思って、まずワラワラといそぐべと思うと、それもいそぐべし、よく見たところぁ、尻尾ぁブランブランブランと動くごんだど。

「さぁ、狐だなこりゃ。こがえなもの化かさっでいられるもんであんまい」
と思って、そしてよく見たところぁ、やっぱし尻尾は太くて狐だから、
「こりゃもっと上手に化けろよ。こりゃ、尻尾なの、もっと見えないように化げっこんだ」
というたごんだど。モクモクと丸っこくしったけぁ、ギィーと出して、
「そんなこと化けっど、あぶないぞ、生命ぁ、アハハ…」
というごんだど。そしたれば、
「おれは狐と思わっだなぁ」
と思って、こんどぁ、音立てて、キャーッというけぁ、体を現わして逃げて行ったど。侍もキャーッと逃げて行ったど。それからこんどぁ、
「あがえなものに、おれぁ化かさっでいられんめぇちゃえ」
と、歩って行った。ところが草ぶくに提灯落ちったごんだど。
「ああ、これは狐の提灯というもんだべ」
と思って、
「こりゃ、ええもの拾ったこりゃ、こいつぁおれぁまず仕まって、宝物にしておかんなね、こりゃ」
どて、その炭焼き小屋さ行って寝っだど。

まだ夜明けもしないような時に、ドンドン、ドンドン、ごめん下さい、ごめん下さいという音する。

「はぁ、人だらば天井の方叩くげんど、下叩くな、こりゃ」

と考えた。そしてこんど、「オウ」なて出はって来たとこぁ、ええ女、まず暗いげんども、はっきり見えっこんだどな。

「ははぁ、こりゃ、昨夜（ゆんべ）は提灯拾って頂いてありがとうございました」

と、こう言わっだごんだど。

「んじゃ、狐か」

「んだ、是非とも、今晩いるからその提灯を返していただきたい」

と、懇ろにまがらっだごんだど。

「いやぁ、提灯だけ返さんね、おれぁ宝にしておく」

「どうか娘を嫁にやるについて、是非とも要るなだ」

といわっだど。

「ほんじゃらば仕方ないな。嫁にやるについでだら、返す。ほんじゃ、祝いに油揚げなどつけてやんべ」

そうしたところぁ、喜んでその油揚げでっしり貰って行ったど。そして、

「今晩、夜になったらば、どうか向うの山見てて呉（く）ろ、みんな来て、提灯行列すっから」

と。嘘だかなえだかと思って、飯食って外さ行って、言わっだ向うの山を見っだところが、やっぱし、ころましく狐提灯つけて列して見せたごんだけど。じいさんのとこずっとさがって見せらっだど。これは面白いもんだな。

狸の太鼓打ち

むかし、山の上に寺があり、寺の坊さんが十人ばり小僧いて、そして修行させっだ寺があったそうだ。

そして、その番代りに太鼓の大きな叩かせて合図させて、掃除するにも起るにも、何でも太鼓でだったそうだ。そうすっじど、信念さんという小坊主は、そいつの番になったげんども、なかなか大きな太鼓、ええあんばいに叩くべと思うげんども、ええあんばいに音ぁ出ないくて、

「なんと下手だな、信念」

なんて、みんなにむさずらっでばり、

「情けないもんだな」

なんて、ある晩、月の夜にここで練習すっじどみんなに不思議なごんだど。村中でも言われっから、ドッコイショとかつねて、山さ行って叩いていたげんども、仲々ひびきはしねえごんだどな。そしている内に、アハハ…と笑う者あっから、

不思議なもんだと思って、向うの木見たところがそっから狸ぁ来て、

「なんだ信念さん、あまり下手だな。おれぁ腹のように叩かねど…」

と、腹ポンポンと叩いて聞かせらっじやらば、とてもええ音だごんだど。

「ほだら、こいつどこさ願ってきくほかない」

と思って、

「狸くん、おれに太鼓の打ちよう教えて呉ろ」

というたらば、

「ほだなぁ、お寺さ帰って行って、お仏さまに饅頭あがっていたの、おれさ明日の晩持って来いな。教えっから、それから墨と硯と持って来いよ」

信念が、

「おやつにいただくの、そいつ持って来っから…」

と約束して、次の晩また山さ登って行ったところが、狸ぁ来ったごんだけど。そしたば、墨一生懸命で小僧はすって…。そうしたところぁ、尻尾の太いところで、

「右手出せ」

というたところぁ、丸く墨で書いて呉たごんだど。

「これ叩いてみろ」

そうしたところぁ、いやいや、自分も

驚くほどええあんばいに叩かれっこんだど。これは大丈夫とて、朝に力まかせに、喜んで叩くと、

「いや、信念、とんな上手になった」

と、みんなに誉めらって、こんどは夜、お湯に入ったとき、墨消えたごんだど。

また次の朝叩いたところぁ、またその通りで…。

「困ったもんだ。いま一度、願って来んなね」

と山さ行って、

「とても、墨、お湯さ入って消えたもんだから、下手になって分んねから、何とかして呉ろ」

というたところが、

「ほんじゃ、おれぁこんど、尻尾の毛三本抜いて、きちっと腕さつけて呉っから…」

といわっで。そうしたらば、

「本当に仕合せなごんだ。ありがたいごんだ」

と思って、そして今度は、みんな太鼓叩きの誰ぁ上手だか、信念も上手だと、そこさ入ったごんだど。そうして力まかせに叩いたところぁ、その毛ぁ吹飛んで行ったど。下手になったごで。そして、

「こりゃ、何さすがってばかりいては、何も分んねもんだから、おれぁ一人で上

手になる他てない」

と思って、一生懸命で自分がどうして叩いたら音ぁ出っか、上手になっかと思って、余念なく毎日叩いてみたば、上手に叩かれっかったど。そして、そいつと同じに、おれも偉い坊さんのようになりたいと思って勉強して、その通りになったど。

足柄山の金太郎

足柄山の金太郎は、熊なの遊びに行かなくて、退屈して、

「いやいや、寒い寒い。熊が何としったかな。熊さん好きな蜜でも甕さ入っで持っていって、御馳走すっかな。伺わなくてなんない。今まで稼いで呉(け)っで…」

と思って、マサカリ背負わねで甕を抱いて動物の村さ行ったごんだど。そしたば向うから、こんどぁ、兎は酒瓶さげて、

「どこさだ、兎さん」

というたば、

「亀さんがあまり来ねから、酒でも御馳走すんべどて、動物の村さ行くどこだ」

「ああ、ほんじゃ二人で行ったらええがんべな」

と行ったところぁ、熊くん熊くん、と戸叩いたら、ビッシリ錠かけて居ない。

こんどは隣の猿さんのところさ行って、
「猿さん、猿さん、熊さんは何としったんだか、錠かけて入らんねけぁ、何としったがな」
　というたば、
「冬ごもりに行ったなだ」
　こんどは兎が、
「亀さん、亀さん」
　というたば、それも錠かけてぐるっと廻ってみたらば、いないくて、そして狸くんどこさ行って、
「何としったか知らねか」
　というたところぁ、
「まず、春まで眠て来るってな」
「どこさ行ったべ」
　というたら、
「ずっと、谷のトンネル越えて行くと、冬ごもりしったか知んねえ」
　ということ聞いて、金太郎と行ったごんだど。そしたば、やっぱし熊が、少し穴なの掘って、そこさ落葉なの敷いて、乾し草なの掛けて、そこさゆっくり眠ったっけど。
「働いたから、まずゆっくり冬ごもりしんなねべな。黙って、起さないで…」
　そこさ、また春になったら会いましょ、目覚めたらこの蜜を食って下さいと書いて置いて、こんど兎さんも、モクッと亀

さんが入って行ったのか、土入っていたの、

「目覚したら、この酒のんで下さい」

と書いて置いて、また春になったら、会いましょと、二人で別っだど。

狐むかし

ある山さ、木こりがいたとこさ、狐は狩人に追わっで、その上に犬に吠えらっで、逃げて木こりの家さ、

「どうか、ここさ入れて呉ろ」

と、頭さげっから、入れたそうだ。そしてまず、

「こっちさ来なかったか」

と、こういって、狩人は来たげんども、いたともいないとも言ねで、分ったなぁというたげんども、首で向うさ見ろというとこで、一生懸命で狩人さ合図したげんども、その合図見つけないで、来ないと言わっじゃもんだから、行ったそうだ。んだから狐はでは って礼もいわねで、ただ行くところだけど。

「なんだ、狐。生命助けてもらって、なんと狐だっても、そんじゃなんねえんだ」

と、こういうたところぁ、

「お前の心わかったから、助けて呉っこんだらば合図しないったって、幸に、そ

れを見つけねで行ったから、生命助かったんだから、お礼言わねくったってええ」
と、こてんこてん、言わっだど。

蛙の坊さま

ある蓮の葉いっぱい植わってた池のところに、蛙はお寺を、蓮の葉で建てて、そこで毎日毎日、ゲロゲロゲロとお経を読んでいたど。モグラのお父さんが、ころっと死んだほでに、そして、
「蓮の華、今日はなんぼ咲くかなぁ、蓮の華咲いただけ葬いしなくてはなんね、おれ。なんぼ咲いたかなぁ」
と、一つ二つ三つ四つ…と数えているうちに七つ咲いたなだど。
「ああ、いそがしい。今日は七つ葬式のともらいしなくちゃなんねえ」
そのうちに、モグラの奥さんが、
「おらえの父さんが、まず、ころっと死んだから、葬らって呉れ」
ゲロゲロギャーギャーというもんで、お経を詠んで、
「父さんが死んで、どこさ行くもんだべ」
というたば、
「極楽浄土に行ったから、ナムアミダブツ・ナムアミダブツ」
と、喜んで帰って行った。その次に今

度は、ヤマガラの母さんが、
「おらえの子どもが巣から落ちて死んだごんだ。葬らってもらいたい」
ゲロゲロゲロと、葬らって、
「その子どもはどこさ行ったんだかなぁ」
というたところが、
「子どもでは悪も何もないほでに、これはお釈迦さまの手の上さあがっていたべ」
喜んで、それもまた帰って行った。そうしているうちに、こんどは、
「イモリぁ死んだから…」
と、また来たごんだど。そして、
「イモリは長い病気をして死んだから、葬らって呉ろ」
ゲロゲロゲロと、また葬らって、それもまた聞いたところぁ、
「ナムアミダブツ・ナムアミダブツ・極楽極楽」
と言わっで、喜んで、こんどは鯉は土手の上さ鯉釣りが来て、釣らっだごんだど。鯉も葬らいさ来たど。
「あまりいやしくて、大きな口あいて食ったから、そいつぁエンマ王さ行って、鍋さ入って煮られるはぁ」
といわっだごんだど。
その次に蝉も兄弟が来て、葬らっても

らって、
「おらえんな、どこさ行った？」
というたところが、
「猫に聞け」
というたど。
そして自分は、
「こんどは誰ぁ番だかな、飽きて来た」
といいながら、まず酒なの飲んでいたところが、土手の上に子どもどら遊んでいて、石投げて、その蛙の背中さ石ぶっつけたところぁ、
「ああ、痛い」
というけぁ、蓮の葉から転んで行って、そして腹大きくして、
「ああ、おれぁ番だな。ナムアミダブツ・ナムアミダブツ」
と死んだけど。

餅の標的（まと）

むかし、備後国に土地のええどこの、広いとこあったそうだ。そしてそこを耕やしたところが、まず毎年毎年米はとれて、食うにも多（うか）くて倉を建てなどして、びっしり米を積んで、なに不自由なく、それでいろいろなもの買ったり、酒は朝げから作って飲んだりして、ゼイタクのしほうずしていたそうだ。そして今度、

あるとき、また人に招ばっで、みのりの秋に奉公人も皆餅を搗いて食ったり、飲んだりして、ゼイタクしったところが、その奉公人が一生懸命で餅を搗いて、弓矢をしたことないから、弓矢してみんべど、酒のんだお客と、「あんまりええがんべな」と、餅をいっぱいとらせて、木さ下げらせたど。若衆は、

「いやいや、餅を木さ下げて、餅を矢でなんつぁこりゃ、そげなことしてええもんだべか」

と思ったげんども、主人のことだから、聞かないでなんなくて、トリモチとって、みな下げたそうだ。そうすると、片端からすっど、面白く当っこんだと。そうすっど、当ったの、みな白い鳥になって飛んで行ったど。そしてこんどは、その次の年から、さっぱり稔らなくなって、段々にみな食ってしまって、元の通りになって難儀して死んだど。

んだから、穀というものは決してお粗末にしないで。むかしなんざぁ一粒の米も拾え、糊を落して飲めというぐらいだったから…。

天人女房

むかし、摂津国に、一平さんという親孝行な人ぁいて、母に早く別っで、お父さんが中風（ちゅうしょう）になって動かんねぐなったの、そのお父さんを毎日背負って、畑さでも田さでもつれて行って、敷物持（たが）って背負って、そして稼ぐどこを見せ申して、自分がタバコのときは話かたりしたり、肩をもんであげたりして、まずお父さんを楽しませて、その次の年、日でりで一つも米みのんね年あっかったど。

そして少しずつ貯（たく）えっだの、お父さんにお粥を煮て上げたり、いろいろして、お父さんに進ぜたいと思ったげんど、とうとう米なくなって、隣村の長者さ行って、

「どうか、お父さんを、こういう風になっていたのだけに、米を少しいただいて、わればりも上げたい」

と思って願いに行ったところぁ、

「はぁ、あまりええ、あまりええ」

と、一斗の米と銭といただいて来て、そして過ぎてるうちに、お父さんが死んだど。

お父さんの、まず葬式ばりもええあんばいにして上げたいもんだと思って考えっけんど、銭ぁない。米ぁない。何と

も仕様なくて、こいつただ埋めたともいらんねがら、おれぁ何とかして奉公でもして、葬式ばりええあんばいにしたいと思ってまた隣村の長者さ行って、米も銭も上げないげんども、またお父さんが死んだもんだほでに、三年でも何年でもええから、葬式する金をいただきたいと願いに行ったば、また米と銭といただいたそうだ。

それから、ええあんばいに葬式して、四十九縁もして、隣ほとりの家さ、

「おれぁ奉公に行かんなねから、どうか家守って呉ろ」

と、そこさ別れをつげて行って、少し坂道のとこで、

「一つ、ここで休んで行んかな」

と思って休んでいたば、なんだか眠気さして、一眠りしてかと思って眠ったところが、天井からふさふさと下がってくるものがある。と、いたところが天から落ちて来たの、六人の女ぁ、ええ着物きて、太鼓に笛に笙など鳴らして来た。

「こんど働きに行くとこだか」

というけぁ、

「音曲でも聞かせんべ」

といわって、うんと楽しく聞いて、ちょっと目覚ましたら、それ皆いない。

「ええ夢みっだったもんだなぁ」

と、今度起き返ったところが、着物などええの着てないげんど、一人、天から降ちて来た娘とそっくりのいだけど。

「お前はどっから来た」

というたら、

「おれぁ、天から来たもんだ」

といった。

「こういう夢見たが、本当に、ほだったか」

「お前はあんまり親孝行したほでに、おらだ行って、なぐさめろと言わっで来たのだ。ほだから、お前は奉公に行くとき、おれどこ妻にして呉ろ」

といわっだど。

「いや、天女を妻にするなんて、もったいない。おれはさんね」

「いや、そうではないから、妻にして貰わねど、おれぁ帰らんね」

といわっで、

「ほんじゃらば、まず、長者さ行ってその話すっど、二人して奉公させて呉れんべがら…」

と行ったところが、喜んでまず夫婦で働かせてもらったど。

「何と名付いっだ」

というたば、

「おせんと名付いっだ」

という。いや、働く働く。

「お前、何の仕事を一番好む」
と。旦那が聞いたところが、
「おれは機織りだ。機織りだら、何でもされる」
「んじゃ、機織りして呉ろ。んじゃ、別な機場さやって呉ろ。機織りするとき、小屋さでもやって呉ろ」
そして、機師たてて糸あずけったところが、
「まずまず、何反ぐらいに織ったらば、ここのとこ、たくさんだべ」
と言うたら、
「いや、織られるだけでええ」
「七十反ぐらい織っかな」
というごんだど。
「いや、そがえいっぱいなの織られっこないから」
と思って、
「お前、見込み次第、織って呉ろ」
というたところが、
「何ぁええがんべ」
「何でもええ、お前のええ通りに織って呉ろ」
というたところぁ、
「南京繻子なていうものか？」
何でも本当に、見たこともないもの織って、七十反ばっかし持って来らっじゃもんだど。

「やれ、今度はまずこんでたくさんだから、お前だ、こんで長く一生暮されんべ。んだから、金をあげっから」

と、長者で金背負わせて、そして、

「お前だ、帰ってもええから…」

と帰って、また元来た道端さ休んだところぁ、

「今日、お別れだ」

「いや、そう言わねで、今迄おれの妻になるどていたもの、居て呉ろ」

というたげんども、

「いや、親孝行だから、お前、一生食れるようにして来いと言わっで、神から降さっだのだから、おらだ登って行かんなね」

と登って行がっだど。

んだから、親孝行しろど。

夢判断

むかし、摂津国に砥鹿というとこがあって、そこに牝鹿と牡鹿がいたげんども、いや、どうして仲悪くて喧嘩ばりしている。

そうすっじど、その牡鹿は明石野の海越えて、あっちの方の野鹿さ遊びに行んこんだけど。そいつ気に合わねくてだげんど、まず行かれるには仕方なくて、牝

鹿がいたど。

あるとき、牡鹿は、

「おれは昨晩（ゆんべ）、とんな夢を見た」

と。

「おれぁ背中さ、いっぱい木なの草なの生えた夢見たごんだ」

と、牡鹿さ教えたど。

「んだから、お前、あげなとこさ行くな。こういう風な夢ざぁええごんでないんだ。お前いつか人でも何でも刺されるに違いないんだ」

と、牡鹿が言うたそうだ。そしたところぁ、そんでも行きたいもんだから、また行ったって。行ったらば、海の中の舟で行き会って、これを見つけたというもんで、弓で捕らっだど。

んだから、夢というものは、ええことざぁ判断するどええげんども、悪いことに判断すっど、どういうもんだか、こがえなことあるんだな。

おのこの島

二人の神さまはおのこの島というとこさ、御殿造って、あまりに小さい島だから、いま少し大きくしたいなぁと思って、御殿建てて、ある時、山さ登って見渡したところぁ、出雲の国などという国は細

くて帯のような国だったそうだ。んで、
そこさ、
「百姓方も、こんでは暮すにひどがんべ」
と思って眺めたところぁ、向うのほの
ぼのと見えるな、兎の出鼻というとこ
だったそうだ。その島、それを引張って
来て、この出雲さひっつけたらば、大変
にええがんべと思って百姓方を皆寄せて
話して、そこの出鼻を切って引張って来
て、
「山こい、早くこい」
と、皆引張らせて、出雲さ引付けてか
ら、出雲は大きくなったど。
おのこの島は今の大八洲になったそう
だ。

雀のヒョウタン

おばぁさんが庭にいたところぁ、すず
めはバタバタっと飛んで来たの、誰かに
石でもぶっつけらっじゃんだか、足痛め
て飛んで来て、おばぁさんのとこの前さ
来たから、それを、
「これは可哀そうだ。これを一生懸命治
して呉れんべ」
と思って、薬をつけて呉れたり、いろ
いろな飯を食わせたりして、毎日毎日、
おばぁさんが傷を介抱しったら、たちま

ち治って、そしてこんどぁ飛ぶようになったから、飛ばしてやったところがある時、すずめのことで、孫どもらに、

「よく、こがえなすずめなの、こがえして大事にすっこど。おばぁさん」

といわっだげんども、

「生きものは、むごさいなぁ、足悪くては飛ばんねんだし、こがえしてもいらんねんだと思って、むごさくてよ」

と、おばぁさんが一生懸命で話して呉れたど。

ある日、なんだか喰わえて来て、ポロッと落したもんだから、

「これぁ、めんどうして、足治して呉(け)たすずめでもあっかなぁ」

と思って拾ってみたば、ヒョウタンの種子くわえて来て、おばぁさんのとこさ、

「これを蒔け！」

というごんだと思って、おばぁさんが種子を一生懸命で蒔いたところぁ、ええあんばいに育(おが)って実(な)ったわ、実ったわ。大したもんで、隣さ呉れたり、そっちこっちさ呉れて、自分も、

「うまいことなぁ、このヒョウタン」

なて、うんと喜んで、それから実が入って、ヒョウタン下げておくべと思ったところぁ、ヒョウタンさ米なの、金なの、いっぱい入っていたごんだど。

「こりゃ、こりゃ、恩返ししてくれた」
と話したところが、欲深かばぁさんが来て、
「種子、おれどさ呉ろ、おれぁどさばり、ヒョウタン呉ながったなぁ」
と、貰って行って、いっぱい蒔いたところが、なって、自分ばり食ったりして、こんどいっぱい残ったの下げて、またすずめの話教えたところぁ自分がすずめいっぱい居たどこさ行って、石をぶっつける、叩くぁして、足を一人で痛めて呉って、そしてこんどは、そのすずめはとうとう片輪になって、飛びもさんねのだけど。ぶん投げるようにしてやって…。
「すずめは、お前さばり親切にしたげんど、おらえさ持って来ない。お前さばり持って来る。もらわんなね」
と、蒔いたところが、やっぱしヒョウタン実ったど。そのヒョウタン、自分が食って、一生懸命で育したな、みんな宝欲しくて、みな下げっだところぁ、なんぼ米ぁ溜っていたべ、金ぁ溜っていたべと思って見に行ったところぁ、いやぁ腐ってそこからウジは湧くやら、虫はたかるやら、蜂は出るやらで、とうとうおばぁさんとおじいさんは大苦しみしたど。

二人娘

雨ぁ降っても、日ぁ照っても、毎日外を眺めて泣いてるおばぁさんがいたど。

不思議なごんだというて、尋ねたところが、

「おれぁ、とんな、まず。二人娘を持って、一人は唐傘屋さ呉る、一人は草履屋さ呉る。雨ぁ降っずど、草履屋が売れねかと思って泣いていんなねし、お天気ぁええじど、唐傘は売れねえかと思っていんなね」

こういう風に毎日泣いてるばぁさんがいだったど。気は心の持ちようで…。

馬の荷物

ある日、毎日、馬で駄賃とりしている人いて、馬さ、ある時塩付けて橋ぁ落ちて、たんと水ぁ出なかったもんだから、

「気付けて渡れよ、気付けて漕げよ」

というて、馬を漕がせたところぁ、石さつまづいて、馬ぁ転んだそうだ。そうすっじど塩は溶けて軽くなった。

「過ちしなかったが、夜なの痛くないか」なて、親切にしたところぁ、次の日もまた塩つけて同じ川渡ったとき、そこでまた転んだそうだ。

「これぁ、この畜生は軽くなったと、こ

んどぁ考えてまた転んだなだ」
と。今度は夜、おんつぁっで、うまいものも食せらんねで、次の日教えて、駄賃とりも考えて、
「また転ぶに相違ない、こんどしみるほど重たいものつけて呉れんなね」
と、俵なのカマスなのつけて、まだ渡ったところぁ、同じとこでまた転んだど。そうしたところぁ、重たくなって、やっと家さ行って、その家でおんつぁっだりして、ずるいことはさんね。馬だって。

石猿

むかし、石の大きな山さ、何丈とある石が立ってて、三丈七尺もある大石ぁ立っていだったそうだ。そうしたところが、そこの石、だんだんに腹が横に太くなるところ分るようだったど。
その石はお天道さまなの、お月さまの露なの吸って育って、腹に何か入っていたらしいような石だったど。そしてあるとき、石は割っで、腹から大きな石玉落ちて来て、その石玉はコロンコロンコロン、ぶっつかるに従って、こんどは石は割れて、中から猿出てきたごんだけど。

それを石猿というど。
　そのうちから出きた猿は、
「いやいや、世の中なんて明るくて、とんなどこさ出きたもんだ。ほんでおれぁ水呑みたくなったな」
　谷さ行って水呑もうとしたところぁ、見たことのないいろいろなものに行き会って、友達になって、
「おれ、頂上さ登ってみっか」
　と思って頂上さ登って行ってみたら、いっぱい猿ぁいたっけど。そこさ行って仲間にしてもらって遊んでいたところが、温かい夏の日に、
「下に、水あっから、そこで遊んだらえ・えんねが」
　と、水浴びに来たそうだ。そうしたところぁ、何だか音ぁすると思って、
「その音ぁするどさ行ってみろ」
　というもんで、行ったら、ドウドウドウと落ちる滝、どっから落ちて来る見た方がええと思って登って行ってみたば、滝の続きで、涼しいことなんて、そこで休んで、そして下見たところぁ、やっぱし深いような洞穴だ。
「そこさ入って行ったのは、王様にすんべ」
　どて、年寄の猿はいったそうだ。そしたば誰も入って行くべという者、いな

かったそうだ。その石猿ばり、自分でざぁっと入って行ったところが、皆々魂消て、眼キロキロとして見て、

「何として、あれは。生きてなの来らんねごで。よくあげなどこさ入ったもんだ」

と、まず皆いだったどころが、眼ひっつぶってクランクランとして見えっけげんど、後見えなくなった。その中さ石猿ぁ入って行ったところぁ、岩さぶっつかって、そのかげぁ、水ぁなかったそうだもな。

そこさ行って立ってみたところぁ、そがえなどこさ立った。そうしたところぁ、まず底に金の橋なの掛っていたそうだ。

そしたば、そこに仙人でも巣喰っていたとこであんめえかなと思って、行ってみたところが、洞穴みたいなのある。そこさ入って行ってみたれば、広いどこあっけど。そこに飯なの、何か食うものなの、いろいろなもの、茶碗のようなものある。誰がいたかと、グルングルンと、その広いとこ見たげんど誰もいね。隅見たところぁ、何か水みたいなものあると思って、舐めてみたれば、とてもうまい酒だけど。その酒を飲んで、まずゆっくり一眠りしたところが、いつまで居だたて大将にならんねがら、行かんなねべなとて、またそこから上って来て、滝のとこさ来たら、

ずうっと上の方さあがったけど。
「おお、来た」
というもんで、みなに魂消らっで、こういう風などこだっけ、というたら、
「行ってみられっどこだし、行ってみろ」
と、みな落ちてって、そしてみな荒してはぁ、誰もいないから、ここにいて、どこさか行ったもんだかもしんねえから、みな持って行く、なんて欲深い猿言うなだけずぁ、
「決してそげなことしねえべ」
なて石猿にいわっで、
「酒ばり、何して拵(こしや)ったもんだか」
蔓なの入っていたけどし、
「ほんじゃ、こげな蔓なのあるから、水さ入れっど酒になるべ」
なて。そして自分方も酒いっぱい造って飲んで、
「おれぁ、王様はオレだ」
「ほだほだ、王様にする」
みんなに囃さっで王様に。自分はまだ足りなかったので、考えた。
「何して石猿考えっだ?」
手長猿ぁ、背中丸くして前さ来て、
「おれぁ死にたくない。死なない法はないもんだべか」
というたところが、
「死なない?生きっだものは、みんな死

なんなねもんだと俺ぁ思う」
と、年取った猿ぁいうごんだけど。そして、
「仏様と神様と仙人ばりだべなぁ」
「ほんじゃ、おれぁ仙人になりたい。あそこは仙人がいだんだったべ。この海渡って、筏さでものってみんべ」
と思って、王様は仙人になるちゅうもんで、みんなで筏を組んで呉(く)っじゃりして、海から筏にのって行って、ある島に上ったところ、見たこともない人、雑魚なの持(たが)った漁師、海端にいっぱい居だったど。そしてあっちでも魂消(たまげ)、こっちでも魂消(たまげ)、そして今度ぁこっちでは着物というものだから、そいつ着ないと分んねな、猿など見たもんだから、みな走って逃げる。そのうちに転んだものから着物をとって、自分が着て騒いでみたげんど、仙人がいたようなどこないがったど。町なもんだから。それから今度ぁ、またぐるっと見て、
「山さ行かねば仙人が住んでいない」
と思って、仙人になるには、こげな開けたところでは分んねからと、また筏さのって別な方面さ行ったば、そこには人もいないし、山ばりのどこだ。ここだかも知んねえし、仙人なんというの住んでる山だと思って登ってみたらば、全くそ

こに門なのあって、そこに番人なのいて、そこで、

「おれぁ、こういう者だから、仙人の住んでいたとこさ来たいと思って来たどこだ」

と、番人どこに話したところぁ、

「ここを通れ」

といわっで、その通りに行ったらば、

「仙人になるには、学問も入るし、修行もしなくてなんね、されっか」

「される」

と。まず学問をしたり、そこでちょっと考えたげんど、取れるまで十年ばりいだった。そしてこんどは仙人に、

「どうかおれに術教えて呉ろ（く）」

と言わっで、頭を三つ叩がっで、後ろ手、こういう風に背負わせらっで、そして仙人が何処となくいなくなって…。

「はぁ、これが…」

賢い猿なもんだから、後ろ手にまかっだのは、後ろさ来いというのだな。頭叩かっだのは、三つの刻のことだなと思って、後ろさ廻ってみたらば後ろさ仙人がいて、待ちていだっけど。そこさ行ったところが、棒預けらっで、飛ぶ術など、いろいろな化ける術なの教えらっで帰って来たど。したらば、

「貴様、仙人さまどこさ行って来たか、

何を憶えて来た」

「おれぁ、木になるようでも、空を飛ぶようでも憶えてきた」

「ほんじゃらば、松の木になってみろ」

五本の指みんな松の枝にして、みんなヤァヤァと、

「何音たてて、ころましくしったとこだ」

と、また仙人が現われたから、こういう風な事情きいてきたど。猿ぁいうから、まず、

「寝言だとて、みんな集まっていたどこだ」

「そんなこと気になるようなごんでは、ここさ置かんねから、帰れ」

といわっで、

「いま少し置いてもらいたい」

というども、慣れたとこ置かんねといわっだもんだから、泣き泣き飛ぶ術おぼえたから、その海をとんで元のところへ行ったので、みな喜んで、

「帰ったか、帰ったか」

といわっで、その術を憶えたって。

人魚

南の海にも北の海にも、人魚という、上は人間で、下は魚の者住んでいたとこあったそうだ。

北の海の、その人魚が、ある日、

「おれは海も深いとこばりいて、つまんないものだ。きかない魚を相手にしたり、いろいろに上にも浮かばないで、こうして住んでいんなねのも、人間に似たおれだ。あわいに浮かんでみっど、人間は歌は唄うし、面白いもんだ。子どもばりも人間さ交わらせてみたいもんだな」

と、あるとき考えて、夜浮かんでみたところぁこの星を見たり、いろいろしてみっど、

「夜というものは、何だか気味のわるいようだ。昼間とは違うもんだ」

と。

「そんでも子どもばりも、人というものは、親切で、決してわれぁ子どもぶんだだっても、粗末にしない性質をもったそうだ。だからおれぁ人間さ交わらせたい」

と、山の方見たれば、産の神でもあるべか、あそこいつでも灯あっから、あそこささえ行って子どもを産せば、誰かに拾ってもらえんべと思って考えていたうちに、神様の門前にローソク屋があって、夫婦ばりでローソク売ってるのがいた。

それから、

「みんな、ローソクのおかげで、おらだ暮らしているから、お詣りして来んべな、昼間はいそがしいからよ」

と、夜、お詣りして、行って帰るとき、海から上がって、石段のとこさ産(な)してはぁ、帰って行った、帰るとき、何だかゴチャゴチャゴチャ、キッキッキィなんていうから、見たところぁ、赤ン坊。

「あら、らら。子ども、おらえに授かった」

抱いてみたれば、尻尾は魚で、

「不思議だ。そんでもこうして授かったなたから、持って行かんなねべ」

と思って抱いて連(せ)て来た。

「おじいさん、こういうもの、捨て子だと思う。不思議なもの拾って来た。神様が授けておくやったのだから…」

と、育(おが)しているうちに、育(おが)ったところが、

「退屈だから、ローソク拵えの手伝いする」

という。決して人さ交わんねで、まず絵具でも買ってあずけて、

「ほんじゃ、ローソクさ色でもとらせっかなぁ」

と、色塗りさせたり、段々ローソクは売れて売れて、うんと安泰になって、こんどは箸とんなねげんど、誰も人さ交わんねんだし、そしてまず、決して出来ない噂だ。見世物にしたいなんて、買いに来た。じいさんとばぁさんが欲にかかっ

て、

「娘を売りたい」

と。その娘は、

「売らって行きたくない」

と。そんでも買うというたのから、銭もらったから、売んなねというもんで、ビリビリとやったところが、南の国さ船さのって連て行かっだところが、いや海は荒れて荒れて、その晩は荒れ、そして嫌んだものを連て行って、神様のおかげだべと思っていたの、だんだんとローソクも売れなくなって、自然と、元通りになって、そして年寄りになってから悲しいばぁさんとじいさんが死んだど。

んだから、授いたものを大切にして育てなくちゃなんね。

雷をつかまえた話

京にスガルという忠義な人いやったど。スガルという人は天皇さまさ、忠義で勇気のある偉い人でござって、この人はある時、天皇さまさ、お伺いしようと思って行ったところが、天皇さまが昼眠してやったとこさ行って、まず、気まり悪りがって、昼眠しったうちに雷の音がする。

「スガル、あの雷を捕えられっか」

と、突飛なこと語りやったどな。そし

たばスガルは、

「天皇さまにそういう風に言わっては、俺は雷を納得させるより他ない。まず行ってみんべ」

とて、行って走って山田の道を通って、畝備山をめがけて、豊田寺というとこまで行って、雷呼ばったそうだな。雷を呼ばって、

「天皇の仰せで、おれぁ来たどこだ。まずお前をつれて来いといわっで…。お前は天皇さまの仰せだらば、聞かねではいられまい」

と、天さ響く音立てて、雷様さ言うたところぁ雷さまは豊田寺のどこで音たてて、

「仰せの通り」

というもんで、ドダーッと落ちたど。そしたば、それから神主を呼んで、経して、篭さのせて連れて来たどこだど。

「天皇さま、まず雷を連れて来た」

「こっちさ連れて来い」

といわっで行ったところが、いや後光がさして天皇さまなの見らんねがったど。

「神さま、神さま、これからお供えをして、御馳走をして、それから元通りのどこさ放してこい」

と、こんどぁいわっだど。それからいろいろなものを御馳走して、お供えをし

て、そして元来た道を、また馬さのって、篭さのせて行って、寺のどこさ連れて行って、

「雷よ、ありがとうございました」

と放してやったど。

兄弟話

むかし、北の国にブドーという神さまが、南の国から女の神さまをつれて行くことで、途中で暗くなったもんだから、ソミンとキョウダンという兄弟のところを訪ねて、一晩泊ることにしたところが、その弟の方は、とてもええ暮しをして、門など立てていた。そこさ行ってお願いするということ言うたところが、泊めらんねといわっで、それから、兄の方さ行って、こういう風だから、一晩泊めて呉ろというたば、

「何でも、おらどこなどは、この通りで何もないげんども、泊まって呉ろ」

と、そのもてなしの心は、いや、本当に粟飯で、蒲団などは着たこともない聞いたこともない。みな綿なの入ってない、粟の穂なのばりつめたものさ、まず泊めらっだげんど、その温かいことは、そのもてなしで大した喜んで帰ってござったど。そして南の国さ行って、長く居て、

八人の子どもつれて、また帰やったど。
そしてそこの備前の国さまた帰って、
「お前は何人もった」
「おれはたった一人しか娘持たない」
と。
「疫神がはびこって来たから、お前に話して行くべと思って、立寄ったのだ。その茅を輪にして、腰にさして、寝んべぁ起きんべぁ、それをはずすな」
といわっで、それを巻いてたうちに、こんどある晩、疫神はあばれて、あっちではねた、こっちではねたで、たちまちうちに、弟の方なの、真先に病気さかかって死に絶えてしまったど。そしてこんど親切にした兄だけは、いろいろな病気にも掛んねで、長く伝わって行った。んだから、願わっだときには、本当に知しゃね人ざぁ、ないもんだから、親切にしなくちゃなんねど。

ネズミとカエル

ネズミは、
「おれは、水というもの見たことがない。んだから、カエルさんが水をどこまでも泳がっで、ええごんだ。おれどこ連れでって見ねえが」
「ほんじゃ、お前どこ連れるにゃ、おれぁ

足さびっしり尻尾をつないで、そうしておれぁ背中さのって行かなくてはぁ、駄目だから、そうしろ」

というもんで、まず考えて、足と尻尾とつないで泳いで行ったど。そしたところが、

「それくらい泳いではぁ、たくさんだはぁ」

というたげんど、

「いや、ま、少し泳がせてみる」

というもんで、そのカエルぁ泳いんだところぁ、鷹に見込まっで、天井から、ダァーと落ちて来て背中にのぼっていたネズミをくわえたど。そうすっど、カエルもブランブランとさがって、両方くわえらっじゃど。

仙人と若衆

トウハリという人は、もはや親に別ってただ遊んで暮らしているうちに一文なしになって、

「困った。なんとしたらええがなぁ、こりゃ食うにも困った」

と思って、町の北の方の門に立って、しおしおとして居ったところに、白鬚おやした仙人がござって、

「お前は金欲しいか」

「欲しいな」
「お前、金あっどこ知しゃね。お前寝ったどこの枕元掘ってみろ」
と。掘ってみたところが、まず金はいっぱいできてる。こんどぁ家を建て、毎日毎日友だちとゼイタク暮ししてるもんだから、その金も使い果して、また元通りになって、また門さ立ってたところが、仙人が来て、
「どうだ、また金が欲しいか」
「おれは金は欲しくない。お前のように、仙人になってみたい」
「仙人にしてくれっから、おれぁ言うことと聞かなくてなんね」
「ほんじゃらば、この竹さ股いで、天さ飛んで行んから、喋んねようにしよ」
といわっで、「はい」という。そのうちに仙人が見えなくなった。そうすっじど、こんどとんなエンマ王が来て、
「何しに来た。何しに来たか語れ」
黙って語んねでいたところが、こんどは鬼にたからっで、叩かっだり、いろいろしたげんども、
「語りさえもしないど、仙人になられんべ」
と思って、なんぼ痛く叩がっでも、なじょしたたて我慢しったところが、その鬼に、

「女連(せ)てこい」
　といわって、連(せ)て来たの見たところが、われの母連(せ)て来らって、いや、母のところをまず、いじめるいじめる。この上なくいじめっどこ、「おかぁさん！」とたぐりついて行きたいげんどもと思って見っだげんども、仙人に言わっじゃもんだから、まず見っだげんども、まず見かねて、
「おっかさん」とすがったところが、
「おれなの、なんぼ苦しんだってええから、お前ばりええあんばいになって…」
　といわっだげんど、お母さんさすがったところが、あっという間に、また元の所に来た。そして、
「仙人がなして黙っていろというたのに、黙っていねごんだ」
「いや、お母さんが、おれは元のようになったてええげんども、お母さんが責められっどこ見っどとにかく我ばりええあんばいになっだいとはいらんね。お母さんさえも、ああいうにみじめに会せらんねから、おれぁええ」
　というたらば、
「ほんじゃ、ええ心持だな。この天井の山に百姓家あるから、そこさ行って、一生懸命で働いて、少しの田畑耕していろ」
　といわって、そこさ行って、なえでもかえでも一生そこで暮したど。

三人兄弟

むかし、丹波国に、一郎治・二郎治・三郎治という三人兄弟がいて、その父と母、早く逝くなって、三人が少し田も畑もあったげんども、みなそれぞれに小さいもんだから、取らっで…。年は一つ違いで、兄は十七才と十六才で、毎日あっちさ手伝い、こっちさ手伝いに行って、三人が稼いで暮して来たげんども、ある晩三人で考えて、

「これは一生ええあんばいになって、いつ明るみに立たれっか分んねから、まず都さでも行ってみたら、ええでないか」

と、こういうたところが、賛成だと、みな兄弟衆は言うたそうだ。そうしたところが、

「ほんじゃ、早く出発した方が、善は急げだから、ほんじゃまず京都さ行ってみろ」

というもんで、おにぎりいっぱい握って朝早く出発したって。そしたところが、峠を通って頂上さあがってみたところが、京都が見えて、

「あら、あそこが京都だ。まずあそこさ行って奉公すっどこがあんべがら、誰が運がええか、誰がどうだか、まず三人がなぁ」

と、腰かけて休んで、
「いや、見たことのない家ばり見えるようだな」
なて、こんど落ちて、坂道降(お)って行ったところぁ、太い木あって、そこで道が三本に分かっでいだっけど。そこでまず、
「この道は都さ行く道だげんど、どういう道ぁ一番近いか」
と思って、まずてんでん、てんでんに、どの道ぁええというたところが、兄は右、二番目のは真中、三番目は左となって、そして、
「三人がみな京さ行けるからなぁ」
と、兄はずっと右に行ったところぁ、景色もええ、広い道行って、
「ああ、こりゃ、ええ道だなぁ、あの二人はなじょなとこさ行くか、二人は先に京さ着くかなぁ」
と思って兄は行った。
向うから砂煙り立てて、ドッドッという音する。そうしたところぁ、まず赤毛の牛が角二本立てて血走った眼(まなぐ)して、そうしてまず駆けて来る。
「さぁこりゃ、なに魂消たんだかなぁ」
と、道をよけっだところが、その一郎治のとこさ、まっさきに、角を向って来た。アバラを突っで、
「おれぁ運がわるい、一番わるい、京さ

着かないうちに死なんなねごんじゃ、あと二人は何とすっか」

と思って、そこで知しゃねうちに、目覚してみたところが、とんなええ御殿さ連て来らっで、なんと見たこともない絹の蒲団の上さあげらっで、座敷を眺めてみっど、金の屏風なの立てらっで、枕元にはええお姫さま、なんでもかんでも見たことない夢だかなと思って、

「薬だから…」

と、銀の鉢さ薬なの…。

「ああ、目覚めたか、薬飲め」

なていわっで、

「ああ、心配しないで、まず痛みはないか」

なて、その女に言わっで、起きかえってみたれば、まだ痛い。

「ああ、お目覚めになって幸せだ。いやいや、まず、心配して、殿様は心配して心配して、生ささえもすっど、片輪になんべぁ、何すんべぁ、生きてさえもらえば、おれぁ使ってやるから…って言いやる。まず清水観音さお詣りにござっどこだった。そしたばあばれてこういう風なことにして。たしか京さでも登るに、京さ知った人でもいないくて、行くのだかなぁと、考えてのことだったから、おれぁ使うということだっけ」

と、こういう風なこと聞いて喜んで、
「薬は京都一のお医者さんの薬だから、飲んで呉ろ」
と言わって、銀のお椀で飲んで、そしてだんだんに痛みも止って、こんどはその殿様は藤原という人だったど。どこさでも聞こえた立派な人でござったど。そがな人におれぁ救われて、どこだかと思って、そこで始めて安心して、早く治りたいと思って、だんだんにええあんばいになったところが、
「ああ、ああ、ええがった。おれも心配したとこだった」
と、その方に、立派な息子なもんだから、気に合って、だんだんと出世して、今なら裁判官みたような名、さずけらっでいだったそうだ。
それから二番目の弟が、それは気の荒い生れつききかない弟だったど。それぁ行った道は真中だから、一番近いと思ったら、とんでもない、一番遠い道で、そうして行ったところが、こんどは竹林なのばりあって、どこまで行ってもええ道でなかったど。
「さぁ、神さまあるどこさ、ほんじゃ今夜、宿もないしすっから、ここさ泊っている他ない」
と思って、縁側さ泊っていたところが、

夜、武士らしい者が肩を叩いて、何者だかと思っていたら、

「お前はどこさ行くとこだ。なしてこがえなどこさ泊っていたとこだ」

「おれはこういうわけで、京さ行くべと思ったげんど、とにかく遠いもんだから、一晩げ泊って明日行くべと思って泊っていたとこだ」

「そういう風なごんだら、おれにええ殿様がいたから、そこさ案内する。そこの家来になったらええんねが」

喜んで、

「いやいや、これは兄だ弟だ何としったか、奉公口、こりゃこがえなええ武士さつかえされっずだな」

と喜んで、その人と行だしたところぁ、まずこんどは左の細道さ行ったところが、

「これは、なんと茂った暗いとこだげんど、さびしいような、おっかないような道さ行ってたんだこりゃ。不思議だな。殿様、こがえなところにいるもんでないんだな。なんと、こういうとこさ来たんだが。なじょなことされんだか、こりゃ」

と、一人で考えて行ったところが、そこは賀茂川の水、分って、細い水あるどこさ行ったところが、その池、大きなのぐるりにオカバミが住んでいっかと思うような池だったそうだ。そこをミソノ池

というのだったそうだ。そこにはむかし女鬼いるどかで誰も行くものぁいながったと、思い出して、

「ああ、これはこんなとこで何なもんだか」

と思って、ずっとその人の後を行ったところがこんどは少し高みのところに行ったところぁ、広々とした、とんな御殿さ行った。

「いやいや。こういうところさ住んで、殿様となっている人もあるものだ」

と思ったげんど、何をか不思議に考えて、その人は、

「ずっと、縁側、おれについて来い」

と、縁側さ行ったれば、ずっと奥の座敷に三十人ばり、ぞろり並んで酒飲みしったところさ行って、そうしてその上段にあがって、少し小高いところさ、熊の皮なの敷いた六尺もあるような大男が酒を飲んで、

「ああ、まずええ小僧が来たなぁ、おれの手下になるか、おれの手下になっど美味いものも食われるし、酒も飲まれんぞ」

なて、大声で言わって、ぶるぶるとふるえて、食ったことないうまいもの食せられんだし、これもええもんだな、と思っていたところが、

「京都さして来たんだど?」

「そうだ」
「ほんじゃらば、晩に京都見物連(せ)て行く」
なていわっで、そうしたところが、
「今晩、京の方ちゃ行ってみろ」
そしたら、馬なの引っぱってきた。その大将になった人が、白馬さのって、あとは五六人は馬さのって、薙刀を持(たが)くぁ、槍ぁ持(たが)ぐぁ、
「何だか、こりゃけったいなもんだな。夜こがえして歩くなんというものは、ここらのうちでは、これはこれは、何者ぁ巣食っているもんでない」
と、心のうちで考えて、ずっと後さ、
「何も持たないから、さぁお前には刀を貸すから」
なて言わっで、その刀貸さっで行ったところが大きな家の門のあるどこで馬から降(お)ちて、こんどは二三人が垣根を渡って入って門を開いたところが、みなどしどしと入って行って、やぁやぁというもんだから、その二郎治がぶるぶるとふるえて、
「さぁ、これぁ盗賊だ」
と、心に思って逃げっど思ったら、
「この矢で射っぞ」
と連(せ)て行がっで、ついていらっだんだし、
「こがえなところさ入ったじだな。お

れぁ」

と思って、つきそいはその侭いたんだし、逃げるには逃げらんねしだし、またついていて、御殿さ行ったところが、その金銀一把みずつ、みんなどこさ渡す。

「これはええもんだな」

と、こんどは悪い方さ心を抱いた二郎治は、これくらいええものはないんだと、それから考えたど。これは有名な鬼童丸という大泥棒だったそうだ。その鬼童丸は源頼光に殺さっで、二郎治はこんど賢いもんだから、その先立ちになって、京都さ行って、どこまでも悪いことさ、二郎治は心行ったど。

三番目の弟は、また気立ての柔しい弟であった。兄たちに別れっどきに、泣いて別れたので、何としったかと思って心配していんなねくらい柔しい気立ての弟で、その弟が行ったところぁ、遠い。

「ここらで宿しなくてはなんねべな。明日行ったらええんだか、誰も泊って来ないんだしなぁ」

と考えて、夕方になったところぁ、女一人、年の頃は五十才ばかりになる女ぁ行会って、

「お前はどこまで行くとこだ?」

「おれぁ京都さ、こういう風にして誰か奉公に使ってもらうとこないかと思って

行くとこだ」
　というたところが、
「おれんどこさ来ねか」
　といわって、その人について行ったところが、何のええ家だか、その家は長者だったそうだ。そしてその長者の家さつれて行かっで、
「こっちさ来い」
　と、その女の案内で、座敷さ行ったところぁ、とても見たことのない座敷、それも何だ、乞食のような者を座敷さ上げらって、何だべ、不思議だなと思っていると、真中さ病人が寝っだけど。まず蒲団の上さあがって寝っだっけ。
「おらえの聟になってもらいたい」
「不躾けな、こがえな乞食のようなのさ、聟になれなんて、いかにしたたて、こんなこと語っざぁないべな。おれどこから、かわっだんだべなぁ」
　と思ったごんだど。そうしたところが、
「そのもとを語んなげれば、聟になって呉ろったって、分んない。おれはこの長者になったのも、金さえもあっどなんでも世の中というものは、金で解決して、何でも苦しむことも何もないもんだから…と一生懸命で今迄金貯めした。貧乏者さ金貸して田畑を取り、いや、何だかにだと偽証文でも何でも書いて、一代でこ

れくらいにした。そうしたところぁ、あの長者では聟に行くものはない、京都中さがしたって、聟に呉れっどこはない。そうすっど、まず妻には三年ばり前に死なって、この娘たった一人、ほれ、おれぁ死ぬじど、どうして暮すかと思うと、おれぁ死に切れない。毎日毎日考えでっど、病気は重くなるばりで、こりゃ起きるということもできない。誰か他から来た人でなければ、聟になの来て呉る人ないと、人を頼んで、京都さ行く人なり、何なり男を抑えて、何とかして聟に入ってもらいたいと思って、こうしったとこだ」

そういう風に語らじゃもんだから、その気の弱い三郎治は何ともいわんねくて、

「そうか、んだれば聟になる」

と。ところぁ、ええ娘できて来たけど、

「安心しろ」と、そこで言うたところぁ、死んだ。それを葬って、そして金を貯めったの、半分をみな貧乏人さ分けて呉れて、たちまちうちに、

「今の長者はええ長者だ。あそこの長者はええ長者だ」

と、みんな喜ぶようになって、花子という娘を蝶よ花よと育っていたの…。

その家に盗賊ぁ来て、その家の宝物や金、その上、娘も連（せ）て行ったという評判になったもんだから、その藤原の殿様は、

何とかしてその泥棒を退治しなくちゃなんねから、その一郎治に仰せつけになって、何百人の家来をつれて、そこさ退治にミソノ池どこさ行ってみたところが、生捕りにしろ、殺さねでという命令なもんだから、それを生捕りにして、手結(ゆ)つないで連れて来たわけだ。

そうしたところが、娘も無事だから来いというて、命令したところが、長者の旦那が行って、二人で見たところが、われぁ弟で、

「ああ、兄さんでないか」

というもんで、そこで二人で泣きすがって、いま一人の泥棒になったものは、手をつながって、白い庭の砂利の上さ坐らせらっでいたの、泣いてボロボロと泣くもんだから、それもよく顔面見(つら)たば、二郎治だ。

「いやいや、これはとんなことで、娘も無事帰ったし、兄弟三人が会って、いろいろな話して、なんでもかんでもええあんばいになったど。

んだから、運というものは、なじょに皆定まっていっか…。

鬼の面

旦那衆のええどこさ生まっで、わがままな娘いだったど。

近所でもししゃまし（もてあます）ていたうちに、そういう器量ええとこから、手紙はどっからでも、山ほど来る。こんどぁおれぁこういう風に好かれっから、鬼の面でもかぶって見たらば、魂消んべなぁ、という心から、鬼の面かぶっど、心は鬼になるからと、蔵の二階さ行って、そしてかぶって見たど。鬼になったど。

「こりゃ、おれのどこさ、オカタになって呉ろ、会わせて呉ろなて、いまいな」

そうして騒いでみんべという心から。

それで剥すべと思うと、とにかく剥んねくて、大江山に洞穴あるそうだから、ここにいらんねと思って、走ってみたところが、早く走れる。木でも草でも何でもこぎ分けて行かれてはぁ、こりゃ鬼だと思っているうちに、いっぱい子分が集まって来て、

「子分にして呉ろ、子分にして呉ろ」と。

そして丹波の国荒すから、頼光さまが命令で、殺さっだど。

オタタカ鳥

兄が帰って来ないうちに、何食ったかと思って殺して腹見たところが、食っていねほで、兄は鳥になって、

「弟恋し、弟恋し」

と、鳴くなだど。

根ぁない話（結句）

流しの鄙（ひ）さ大きなカブ出きて、みんなでむしって、切って荷縄つけて引っぱったば、ポキッと。根ぁない蕪だった。根のないムカシざぁ語らんねけど。こんで止まり。とーびんと。

我慢くらべ

賭けごとみたいなことしたとき、負けらんねから、

「大便、あそこさ行くまで我慢する」

「おれぁ、ほんじゃまず、何か考えて、生きものでも背負うべ」

と、賭けごとした。

そうすっじど、背中でモソモソモソと、背負ってはいられず。もう一人は、まず大便の気、いっそうで歩くったって、

「いや、大便、あんどきああして、こう

いう風にしておくとええがった」
とにかく堪らんねくて、坂道を二日二晩歩き通して我慢して、そうしてある坂さ登って、岩の上さ登んべと思ったところが、その大便できたど。そしたば、その生きもの背負ってた人が、手前でとにかく生きものなもんだから、かっちゃがったりして、背負っていらんねくて、その手前で落したど。またその大便はあんまり力を入れて、我慢したもんだから、石になって転んだど。

小僧と狐

和尚さんと小僧がいて、和尚さんが下ささがっている留守なうちに、狐は夕方、
「小僧さん、小僧さん」
と、こう呼ばって、
「不思議だな」
と。不思議だから戸を開けないで、本堂の曲り角で見たところが、狐だったけど。
「おれどこ、人ばかにして、なんぼ吠えたって、狐に小馬鹿にさっでいらんね」
と思って。
そしたば、尻尾でズウズウズウとして、

呼ばって、頭でドドンドドンとすんのだけど。

「これはやっぱし賢いもんだな」

それから、そっと台所の、狐のいたどこさ来て。狐ぁ頭でドドンドドンとして、

「小僧さん、小僧さん」

と、そうすっどき、その勢いで、ぐっと開けたれば、狐はドェンと入って来て、台所の下さ落ちたど。こんどは戸を勢いよく閉めて呉(く)れんべと思って、箒なの持(たが)って叩いたげんど、足ぁ早いもんだから、どこさ行ったか見当らね。

「なえだか、家の中にいたに違いないべげんど、そのうちに和尚さんが来てくれればええ。こんな狐なの負けていらんね」

と、度胸ええく構えて、そしてこんど仏壇の方さ行ったけぁ、羅漢さま二つあっけど。同じで、どっちがどうなんだかなぁと思って、

「羅漢さまは、おれぁお経聞くじど、舌(べろ)出して喜ぶ。どっちぁ本当の羅漢さまだかな」

と、賢いこ小僧だからな。木魚叩いて、お経詠んでたところぁ、やっぱし舌、やぁと出した。

「やぁ、これだな」

と思って、こんどは、

「本当の羅漢さまだな」

と賞めて、

「羅漢さま、御馳走したいから、まず下ささがれ、うまい油揚げあるし、なんぼもうまいもの和尚さま持ってやったから、さがれ。御馳走すっから」

その羅漢さまはコツコツと下がって来たど。なんだって上手に化けたもんだなぁと思って、

「さぁ、ほんじゃ、羅漢さま羅漢さまはうまいもの食ったときには、この釜さ入って、ちゃんとして、おれのいうこと、みな聞くもんだ。羅漢さま本当の羅漢さまはそうだ」

というたところが、羅漢さまは釜の中さ入ったごんだど。それからギリギリギリと縛って、

「とんなもの、和尚さま来たっけ、まずまず、生捕りにして置いっだどこだから、まず」

というもんで、

「おれと和尚さんばりでは分んね」

と、みんなどこ頼んで来て、生捕りにしたど。

仏さまが牛

あるとき、父の日に、父の法事すっからと、和尚さんに行き会って、息子は和

尚さんどこ連(せ)て来たって。そしたところが、その和尚さんが、たんと福しくないもんだから、ええ蒲団さ寝せらっでた。その蒲団欲しくて、

「こんな蒲団さ寝たことない。なんにもいらねから、この蒲団欲しい」

と、その蒲団持ち出したところぁ、

「こらこら、その蒲団持(たが)くな」

と、こういう音するって。そうしたところ、

「誰かいたべかなぁ」

と思って、どこ見てもいない。牛だけ牛小屋にいただけだった。

「なんだって、牛ぁ音立てたんだべかな。不思議だな」

と思って、その牛さ声かけたって。そしたば牛が、

「おれが、ここの家守ってるために、ここさ生まっじゃのだ。悪いことしたり、いろいろしたり、家さ来て、さんね」

という。牛は音たてたど。そのことを今度ぁ息子さ話したとこぁ、

「いやいや、それとも気付かねでいたとこだ」

そこで、牛を撫でていたれば、こんどはええ敷物さあがったって。

そうして、和尚さまにお経を上げてもらったりしたところぁ、心地ええく眠っ

たかと思った、ところが、死んでしまった。

んだから、死んでもええと思って守ってるもんだから、大事にして、仏さまなんつぁ、いなくてなんね。

あとがき

『牛方と山姥』第一集を作ろうと思って話者の海老名ちゃうさんに話した時に、「これ以上はとても思い出せそうにない」ということだったが、あれから三回ほどお邪魔した間に、第一集以上の分量が集まってしまったのには、こっちがびっくりしてしまった。まだまだ知っていられるようで、みんな聞かないうちは…という申し出に、こころよく応じて下さるのは、ありがたいことであると同時に、民俗研究にとっても極めてうれしいことである。特に「鮎売り与吾兵衛」「狸の太鼓打ち」「蛙の坊さま」「天人女房」「雀のヒョウタン」「二人娘」「三人兄弟」「小僧と狐」などは、この地域では未見の新しい発見であり、重要なものであろう。そしてそれ以上に「根のない話」は昔話の民俗位層を考えるのに大切なもののように思われる。

昔話がどう伝承されて来たかを知ることが最近の民俗学界の問題点になっているようであるが、伝承の経路を理解しながら昔話を聞くことによって、昔話は本

来の姿に復元できるのではないか。そのような方向で昔話を研究して行きたいと思っている。

この集のために、話者である海老名ちゃうさんは勿論、海老名正二氏、同学の奥村幸雄氏、海老名伊都氏に多大の御手数、御援助を受けた。記して感謝申し上げる。なお「高野山」の昔話もお聞きしたが、集録を次回にまわすことにした。

昭和四十三年十月

話者　海老名ちゃう
山形県西置賜郡白鷹町滝野

続　牛方と山姥
海老名ちゃう昔話　第二集
昭和四十三年十月十日　発行
編者　武田　正
山形県南陽市三間通二三二の三

山形短期大学民話研究センター資料叢書

続　牛方と山姥

海老名ちゃう昔話　第二集

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十年一月三十一日

山形短期大学民話研究センター
〒九九〇―二三一六
山形市片谷地五一五
山形短期大学附属図書館内
（電話）〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書　既刊（再刊順）

『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市簗沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ　米沢市六郷・宮井の昔話（一）』
（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）

『かっぱの硯　長井市・米沢市六郷の昔話』
（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）
『行けざんざん　小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
『お婆の手ん箱（一）　阿部キヌオさんの語り』
（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）
『牛方と山姥　海老名ちゃう昔話　第一集』
（一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊）
『続　牛方と山姥　海老名ちゃう昔話　第二集』
（一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊）
『続々　牛方と山姥　海老名ちゃう昔話　第三集』
（一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊）
『牛方と山姥（四）　海老名ちゃう昔話　第四集』
（一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊）